

離せしめた。自然法學派が今日に至るまでも尙ほ依然として、若干の頑固舊弊なる學者の間に、落魄しながらも一縷の餘命を繼いで居るのは、當年ヴォルフの著書の異常なる流行に負ふものである。

人間の凡ての行爲の究極の動機——結局あらゆる社會的機能を生み出す——に關する心理學的根問題は、今日も猶ほ百年前と同様に一向究明せられて居ない。人間一切の行爲の動力が、果してホッブス以來功利主義的倫理説が一般に斷定するが如く、單に自愛のみであるか、或は啓蒙哲學及びカントに追隨する獨逸思辯哲學の主張するが如く理性であるか、將た又前世紀の英國道德學者及び其の先頭に立てる高雅なる兩友ヒュームとスミスとが、グロティウスの「社會派」と呼應して高唱するが如く、自然的利己主義の外、更に感情（同情）が之と相俟つものであるかは、凡ての人の、隨つて又今日の社會學の、核心問題である。

上に叙述したる第十八世紀の西部歐洲に於ける社會哲學思想の範圍に於いては、先づ第一にホッブスの「利己哲學」が依然として——但しカントの出現に至るまで——牛耳を採つて居た。之れに對してはロック及びモンテスキューが代表したるが如き稍々穩健化したる形式の此派の理論が貢獻するところ頗る多かつた。ジョン・ロック（一六三二—一七〇四）は、社會學的並に倫理的問題を首尾完成せる關係に於いて取扱はず、唯だ隨時隨所警句的に之に觸るゝに過ぎなかつただけ、真正なる社會哲學を助成するの功は頗る少なかつたけれども、然かも彼れの社會哲學的着想の或ものはこの新興科學の醗酵

過程に於いて重要な思想的酵母たることを失はない。ロックが「衝動生活及意志生活の心理的機構」(ヴァインデルバントによる)を、自家の倫理説及國家哲學の基礎となしたる一事は彼れの炯眼を窺はしむるに足るものであり、而して今日の社會學が遺憾ながら、尙ほ未だ十分に之を評價利用しない長所である。社會的活動の全部を人間の意志を原理とする統一的體系の上に建設せんとする試みは、最近コイゲンが其著「文化の哲學への理念、文化守護者」(一九一〇年)に於いて之を敢行した。ロックが彼れの時代の合理主義的精神に於いて所謂「自然の法則」より出發し、而かも「自然の光」並に「啓示の聲」に對して、苟も靈魂の實體性に關する問題に答ふるに意義深重なる「恐らくは」を以てした哲學者に相應はしからざる程の如何はしき讓歩を爲して憚らざることは、多く責むるを要しない。此等の超自然的説明は畢竟時代の鏽滓として容易に之を除くことが出来るもので、毫も累を地金の品質に及ぼすものではない。之と相並んで「人間行爲の價值等差を決定する唯一の批判標準として、此等行爲に於ける、幸福促進への傾向といふことが殘留する。故に或一定の行爲の有益若くは有害に關する經驗が、此行爲の道德的批判の唯一にして自然なる源泉である」とする、ロックの社會學的意思表示は、依然として生命を失はない。斯くの如くにしてロックの法律哲學及び國家哲學は、彼が完成したる經驗主義に對して當時の風尚たる自然法を應用したるものであることが明かである。吾人は人間の經驗的單獨存在——彼れの生活、自由、健康、所有等——から出發しなければならぬ。單獨人その

ものにありて、その行爲の理由の源泉と見るべきものは、必要であると。ロックは此れと共に一の發見をなした——但しそれは決してロックの獨創新奇なる發見に非ず、當時既に世に行はれて居たもので、恰も之と時を同じうしてウィリアム・ベティも同様のことを言つて居る——即ち、占有と相並んで人間の勞働が凡ての財産の起原及權利であると謂ふことである。それは兎も角として、更にロックが「立憲的國法」の創造者なること、彼れの「代表制憲法の原則」中に、既に後のモンテスキュー以來今日に至るまでのあらゆる國法理論に於いてその不變なる要素となつた「權力の分立」を主張して居ること等を數ふるならば、吾人がロックを目するに、その精神の光輝を以て人間の生活及び思想の殆ど凡ての領域を光被し之を肥沃にしたる中心的人物と爲すことの決して不當でないことを知るであらう。價值形成の實體として人間の勞働を首位に置く點に於いて、ロックは後年のスミス及びマルクスに影響を及ぼし、又憲法主義の創建に於いて——但し之に當つて彼はホッブスとは反對に、指導統御の地位を「君主」に與へずして「法律」に與へ、而して法律其もの即ち至上權力を民衆意思より導來する——モンテスキュー及びルソーの爲めに道路を開拓して居る。更に彼れの心理的分析は、ヴォルテア及び佛國百科辭典派に對して模範を垂れ、認識論の基礎を爲して居る彼れの理論は直接にライブニッツの「悟性新論」を喚起し、且つカントの「純粹理性批判」に對して影響を與ふること少くなかつた。しかのみならず歴史の諷刺劇は、自由主義の開祖を、同時に社會主義の創立同志者として

選擇するが如き、好讒を敢てして憚らない。即ちロックは、その憲法主義に於いて自由主義の爲めに道途を平坦にしたること、猶ほ彼が價值形成の主要なる實體としての勞働を發見したることに於いて、社會主義の爲めに東道の主となつた如くである。

シャルル・ドゥ・モンテスキュー（一六八九—一七五五）は、其著「波斯手簡」（一七二八）及び「法律の精神」に於いて、單に當年ロックが植ゑた蒼鬱たる智慧の大樹から枝もたわゝに垂れて居る熟果を摘み取つたものに過ぎない。ロックと等しくモンテスキューも亦、自然法によつて凡ての人の自由平等を力説する國家の埒内に於ける權力分立の要求に於いても、兩者其揆を一にする。但しモンテスキューは、此分立の形式に於いてロックと相異して居るのみである。人間の社會性に對する氣候風土の影響を重視する點も亦同様に、ロック及び更に進んでボーダンに遡源する。モンテスキューは英國を模範として施行せらるべき立法により、而して獨り之によつてのみ、人類の再生を期待し、一步も之より深く穿鑿しなかつた。モンテスキューより二派が分出して居る。一は刑法改革者ベツカリア（一七三八—一七九四）、他は英國憲法主義の批評家フィランデリ（一七五二—一七八八）是れである。之に反し英國憲法の辯護者たるブラックストーンは忠實にモンテスキューを宗として居る。若し社會學的方向に於いて之を觀れば、ファীগソンの「市民的社會の歴史」はモンテスキューに優ること萬々である。ファীগソンは人間性情の社會心理的方面を研究の對象と爲し、自愛、好意及び自尊を相互に計量し「人間

社會の自然史」の最初の企圖を遺して、初めて「深み」ある社會學的造詣を示した。之と對比すればモンテスキューの人格の重心は、社會哲學上の業績よりも、寧ろ彼れの立憲的國法が及ぼしたる無限に深き政治的影響に存する。彼は、世界觀を纏めて體系的に之を完成することに多く意を留めなかつたのである。吾人がモンテスキューに於いて之を見るが如き一個の體系家としての素質は、本來唯だ歴史哲學に適するのみである。而かも、歴史哲學に至つてはフリントが道破する如く、モンテスキューは竟に一等を、より大にして深き伊太利の學者・デョーヴァニ・パチスタ・ヴィコ（一六六八—一七四四）に輸せなければならぬ。吾人がフリント（註八）及びヂエ・ミシュレー（註九）諸家の研究によりて遺憾なくその大綱を學び得るヴィコの名著「諸國民の共通性質に關する新しき科學の原理」（一七二五）は、慥に歴史哲學上の知識の鑛坑たることを失はない。然し乍ら此等歴史哲學的材料は、吾人當面の任務と相關すること極めて稀薄なるが故に、吾人はその頗る興味多かるべきに拘はらず之に關して今多く論ずるの迫が無い。加之、ロバート・フリントの大著三卷（其中にヴィコ論も含まれて居る）は、歴史哲學の理論家に關して詳述餘蘊なきが故に、吾人は歴史哲學的理論の社會哲學的内容に就いて更に研究の歩を進めんと欲する者に對し、唯だ此好著を推薦するに止むるも差支が無い。

十、ルソー、ヒューム及びブリス

モンテスキューが時代の社會的思想を喚起し政治的良心を發動せしめんが爲めに、自由主義の散藥の適量を小心翼翼として投ずる所に、熱血兒にして天才的狂人であるルソーは社會主義の爆彈を掲げて大膽に無二無三に闖入する。特に「社會契約」（一七六二）に收められて居るが如き社會契約の教理の中には、これを哲學史的に見れば、民主々義化せる自然法のあらゆる代表的意見が興味多く綜合されてゐる。ルソーの社會哲學的功績中最も獨特なるものは、その冷靜なる物質的材料よりも寧ろ魅力旺盛するその形式に存する。自然状態の小説的描寫、自然にして讓渡すべからざる人權の説教、全體の幸福を凝視する功利主義的動機よりの國家契約の演繹、讓渡すべからず又分つべからざる人民主權の堂々たる斷定、自由であるべきことの強制を包含する平等の狂信的宣言。此等のもものは悉く自然法の藥籠より出づる成分であつて、グロテュウス以來世上到る處に賣り出されて居る平凡なる商品である。故を以て、ルソーの爲めに社會哲學に於ける指導者の地位を確保するものは、彼れの社會哲學的議論の「何物」即ち内容ではなく、専らその「如何に」即ち「方法様式」である（註一〇）。曩に、ロックより政黨の星座に於ける自由主義的方向が分岐したる如く、ルソーよりはその社會的方向が分岐した。公共の幸福がロックにもルソーにも將た又古往今來あらゆる時代の法律哲學者の大多數にも國家の最高目的であることは謂ふまでも無い。又兩者は自由を以て人間の核心的本質と看做して居る。但しロックは彼の要求する代表制憲法の範圍内に於いて、個々の人に對し各自の器量に應じたる一生を

遺憾なく送り了ほすことが保障せらるゝ場合に、所謂自由と公共の幸福とが存在すると信するに反し、ルソーは、個人が彼れの一切の権利を何等の留保なく根幹枝葉を擧げて悉く公共に委譲する時、初めて然りと爲すの差あるのみである。而して斯くの如くにして造り出ださるゝ民衆の綜合意思を以て、ルソーは制限、代表及び分割等の不可能なる主権を見るのである(註一)。「一般意志」と「凡ての人の意思」とに關する彼れの區別は不磨の定説となつた。併し乍ら、ルソーは、平等の怪神モロホに、個人の自由の犠牲を捧げて憚らなかつた。如何となれば、ルソーが大聲疾呼したる「人權」の中には自由も亦之に數へられ、然かも此自由とは、人間は自由ならざるべからずといふ強制を受くべき者にして、且つ特に一般意志の中には個人の意志も包含せらるゝものであるといふ風に解釋せらるゝのであつて、斯くの如き自由の如何なるものであるかは、佛蘭西革命の歴史、特に最近の露國ボルシェヴィキが、千古不滅の文字によつて記し出してゐる。而して佛蘭西革命が事實に訴へて、萬人の絶對平等の實行を決定的に否定したので、こゝに心理的に容易に了解し得る反動として當の佛國に於いてルソーの漫畫的模倣者——シエース、ヴォルネー、マレシャル、サン・ラムベール等——を猛然排撃したる理想家の一群——カバニ、デチット・ドゥ・トラシー、ドゥロー、アムベール、メーン・ドゥ・ピラン等——が輩出し、而して彼等も亦平等狂の連中と髣髴たる誇張に趨つたことも、多く異とするに足らない。凡ての「動」が必ず「反動」を挑發するが如く、精神の世界に在つても亦毒を制するには毒を以てすること以外に

方法がない。

ルソーの創造力は全然別個の方面に存する。彼れの「社會契約論」が、カントの哲學及び獨逸の古典哲學に於いて勤めたる役割は、決して輕微では無く、又彼れの財産問題の提起は、「社會問題」史に於いて準繩的意義を有することは拒まれないが、然かも彼れの眞の長所は、寧ろ歴史哲學の領域に存する。此點に於いてはこの性急なるディレンタントが、却つてヘルダー及びカントの如き巨匠を門弟と稱することが出来た。歴史的に成立した文明の價值に對する彼れの徹底的否定、並に彼れの兩懸賞論文(一七五〇年の「科學及藝術論」、一七五三年の「人間に於ける不平等」)に於ける大膽なる企圖——人類は自然へ歸還して、其歴史をもう一度、最初から始めなければならぬことを、焔の如き舌端によつて説かんとする等は、獨り具體的なる社會的生活のみならず、亦抽象的なる科學をも著しく改造したる程、爾く改革的性質を帯びたものであつた。科學に於いて歴史哲學は新しき衝動を彼より受け、公共生活に於いて、新興の社會黨が彼より武装を得た。假令當時佛國に於ける經濟狀態及び政治的事實は既に革命勃發を促すべき材料を十二分に胚胎したとは謂へ、然かも其著「エミール」第三卷に於いて赤裸々なる言句を以て革命の勃發を宣言するのみならず、更に豫て用意の火藥函に導火を投じたるものは、實に百科辭典編輯派中のルソー其人であつた。

ルソーの爆發的性情は、人の知る如く彼と短時日の交友を結んだヒューム(一七一一—一七七六)

の如き孤獨狷介なる思想革命家と到底永久に相結ぶことは出来ない。思想的超躰性の模範ルソーと、高雅なる思想的冷靜の典型ヒュームとは、這般の對照の存在する以上、互に知友たり得るも決して心友と爲ることは出来なかつた。此の兩雄の對照は、竟にかの顯著なる對偶を生み出した。即ち冷靜なる「懷疑者」ヒュームは、人間の社交性を感情（同情）の上に築きたるに反し、熱狂的感情哲學者ルソーは、之を利己主義の上に建設した（註二二）。「懷疑者」ヒュームはその倫理説及社會哲學に於いて、世人が此の嚴辣なる批判家に期待すべき筈であつたよりも遙に多く「道德感情」の哲學の代表者等と接近して居る。「同情」の概念を、道德現象の説明に、就中、道德的批判に現はるゝ世界主義的性格に、適用したる點に於いて、ヒュームは諸種の近代倫理學説の完成に取つて頗る意義深き進展徑路——ハッチェスンに始まりスミスに於いて頂點に達する——に於ける中間に位する者である（註二三）。

「同情」の語を解するにヒュームはカムペラントの如く「好意」の意味を以てせず、寧ろハッチェスンと共に、吾人が自己の行爲並に、他人の行爲に對して懐くを常とする是認若くは否認の隨伴的感情（快感及不快感）の意味を以てする。即ちクラーク及ウォラストン等の哲學者が、人類の道德的行爲は論理的に正當なりと考へらるゝことを要すと主張したるに反し、ヒュームはハッチェスンと共に、道德的行爲に對する論理的批判標準を排し、之に代ふるに心理的批判標準を以てした。ヒュームによれば、感情若くは——今日の精神物理學の稱呼に隨へば——感情の調子が道德的なるもの及び社會的な

るものを判斷する尺度となるのである。彼にあつては社會的要素が著しく重要視せられ、特に社會的道德といふ概念が彼によつて發見された。彼は、歴史家としても有數なる人物であつた丈けに、個人化、原子化を特徴とする彼れの時代に對して根本的に反感を有した。あらゆる道德的事象の意義及目的は、個人の幸福に非ずして社會的幸福である。而して人間は彼が自ら社會の一員と感じ、之に隨つて行動する場合に於いてのみ、又其程度に於いてのみ道德的である。

利己的要素はヒュームにありても亦勿論決して全然排斥せらるゝのではなく、唯だ緩和せられ、且つ同情の爲めに蔽はるゝに過ぎない。又、英國人にとりて當然自明と考へらるゝ功利主義的並に幸福主義的要素も、彼れの「倫理的唯名主義」に於いて全然没却せられず、寧ろ單に「同情」に吸収せらるゝに過ぎない。如何となれば快適と有用とは、ヒュームに隨へば、依然として、「同情」の決定的要素なるが故である。

然し乍ら彼が經驗主義の狂信者たるに拘はらず、その社會哲學を感情の不安固なる基礎の上に建設したることは、頗る奇とすべきこと、謂はなければならぬ。或時は形而上學に對して憤然として「事實に關し又現實に關して、數學的研究若くは觀察を含まざるものは、悉く之を火中に抛却せよ」と熱罵したる猛獅は、その道德哲學及び社會哲學に至つて忽然として馴れたる小羊となり、快不快の感情に退嬰低回して、疊に自ら嚴然として要求したる「事實に關する數學的研究若くは觀察」が、正に感

情に於いて、其效力を減殺せらるゝこと最も多きを忘れたるものゝ如くである。感情の心理に關する最近の研究が痛切に吾人に訓へたことは、實驗の最も困難なるは正しく感情に關するそれであること、並に數學的に確定し得る事實に到達することの最も稀なるは、感情の研究の場合であるといふ事實であつた。更に因果律の批判的破壊者たるヒュームが、人間の想像力に與ふるに、思考過程の統一化に於ける一個の中心的地位——それは彼にあつて、恰もカントに於ける悟性機能としての範疇と略ぼ同一なる役割を演じて居る——を以てし、而して吾人の外界認識の全部を結局此外界に對する吾人の信仰に、而して此信仰其ものを、更に感情に遡源せしめんとする者なることに想到すれば、吾人は今やヒュームの「懷疑主義」といふ寓話と斷然相絶つべき時機に臨んで居ると稱すべきである。(註一四)。

「感情哲學」は歲月を経るに随つて益々眞摯に、自己に依然として内在する功利主義的特性を擺脫せんと努力するに至つた。曩にヒュームは彼れの倫理的唯名主義の基礎を、人間行爲の道義性に對する究極の批判標準としての效用といふことに置きたるに反し、彼れの友人アダム・スミスは、この功利的要素を出来る限り除却せんことを欲した。スミスにありて道德的の命令及禁止の批判標準となるものは、ヒュームに於けるが如き外面的效果に非ずして、人間行爲の内面的にして最後なる動機である。規範は凡ての道德概念の最初ではなく、反對に人間行爲の道德的内容に關する個々の經驗の總計の沈

澱物である。ヒュームは抽象的正義に對して強制的なる心理的動機を發見することが出来なかつたが、スミスは此動機を、人間の「自然的なる報復衝動」に於いて見出だし得たりと信じた。彼に於ける道德的基礎要求は「利害關係無き傍觀者が汝に同情し得るが如くに行動せよ」といふにあつて。斯くの如くにして「國富論」の著者の「道德感情論」は、社會哲學的に之を觀れば恐らくヒュームの「道德原理の研究」に比して深きこと一步であらう。ヒュームに取つて恐らくは不可能の難問題である良心といふ事實は、スミスによつて精密に説明せられた。而して歴史派經濟學から經濟的利己主義の典型と銘打たれたスミスが、社會哲學的には全然正反對なる光の中に現はれる。スミスにありて幸福主義は、一抹審美的の色彩を帯びて居る。彼は個人の幸福の爲めに辯ずること、決して社會の幸福の爲めに然かするより少くはない。然し乍ら斯の如き凡ての人の幸福の促進は、彼にあつて單に功利の爲めの要求なるのみならず、亦實に美の爲めの要求である。彼は社會的有機體に於ける平衡的調和を、恰も巧緻なる機械の完全性に於けると同様なる審美的快感を以て觀照する——蓋し「國富論」の著者が、「道德感情論」の著者を冷眼に蔑視する審美的譬喩である。

十一、ベ ン タ ム

「凡ての人の幸福」といふ合言葉は、伊太利に於いては法理學者ベッカリア、英國に於いては酸素

の發見者として有名なるジョセフ・プリーストリー（一七三三—一八〇四）によつて略ぼ同時に世間に流布せられた。今や、「最大多數の爲めの最大幸福」といふプリーストリーの言は、永久に哲學的日程から消滅せざるに至つた。而して最後にデュレミー・ペンタム（一七四八—一八三二）の如き卓識者が、ヒューム及びプリーストリーに由來するこの功利的公式を彼れの世界觀の中心に推し進め、且つ無の實證的科學的材料を以て之を潤色飽和して以來、此公式は、現世紀に於ける社會學各派の「争の種の林檎」となつた。

最大幸福と最小不幸の公式（最大多數の最大幸福）は、殊にそれが凡ての社會的及び國家的施設の唯一の支柱であると思ふべき時に、餘りに偏狹に見ゆることは謂ふまでもないが、而かも吾人は所謂「露骨なる功利主義」に對して、盲目粗笨なる批難を試みんご身構ふる前に、先づ二個の點に注意することを要する。第一は此の社會的幸福主義が既にソクラテス以來凡ての主要なる哲學者——最後に英國の哲學者——の血液中に潜在し、それが爲めに此方向に對する最も徹底的にして且つ最も成功したる折伏者カント其人を以てしても、尙ほ且つ幸福主義の血管を根本的に切開して放血療法を行ふことが出来なかつたことである。第二にはペンタムの功利主義が個人的利己主義の是認に非ずして、却つてその拘束であるといふことである。即ちペンタムは一個の「道德的豫算表」を作製し、人間行爲の動因に關する一覽圖を示し、斯くて個人的利己主義の畢竟寧ろ明かに有害であり、隨つて若し個

人が眞に自己の利害を十分に理解するならば、既に自己の利益の爲めのみを以てしても、宜しくその利己主義を却けて途を社會的利己主義に譲るべしといふ結果に到達した。即ち個人の幸福は、常に到る處、必ず凡ての人の幸福の下位に立つべきものである。然るに社會的幸福といふ思想が、決して一個の所謂「露骨なる功利主義」的思想でないことは、理想主義と共產的愛他主義との開祖プラトンが古來常に此の純粹にソクラテスのなる思想の典型的代表者を以て目せらるゝに徴して明かである。

他の問題は謂ふまでもなく次の點である。即ちペンタムが殆ど滑稽に近きまでの分類辯を以て作製したる快及不快の對照表が、果して快感及び不快感の主觀性を酌量しても尙ほ凡ての社會的機能及政治的施設の客觀的價值標準たるに適するか否か、の問題である。成程、社會的有機體に於ける功利要素の重視及び微に入り細を穿ちたるその計測は、慥かに正鵠を得て居るが、之に反して、謬つて居るのは——特に異常に分化したる文明人の十分に發展したる性質にありて——ペンタムが此等の功利的要素に附會して居る排他性である。此點に於いては社會哲學者ペンタムも亦、畢竟多數哲學者と同じく、人間性情の統一慾の犠牲者の一人たるを免れない。加之、彼が彼によつて有名となつた例の公式に對して、世人一般が公理としての確實性と不可争性を認容すること、恰もユークリッドの原則に對するが如くならんことを要求したるは、正に一種の狂氣に墮するの悞ある熱中性の一であつて、此種の「偏向性の天才」に於いて、屢々目睹する所である。ペンタムが、彼れ的主要原理の這般の硬

直なる偏向性を、科學（必しも單に哲學のみならず）の異常に廣汎なる範圍にまで推及することを敢てしたるは、人の知るが如くである。特に哲學に對しては彼れの倫理學（本務論）の外、形而上學、論理學及び言語學等に於ける探究が裨益するところ多かつた。而して「凡ての人の幸福」の宣傳者に於いて、何物よりも先きに心頭を徂徠する筈であつた「社會問題」に對して、ペンタムは、僅に通りすぎりに觸れ去るに過ぎなかつた。彼は貧富の間の經濟的平均を説き、且つ斯くの如き經濟的平均を達成せんが爲めに、相續權を制限すべしと主張した。更にペンタムが「國立慈善協會」を設け、無産階級の兒童を大規模なる國立造營物（一個所に二千人宛を收容する）に於いて扶養教育することによつて民衆の窮苦の救済豫防を策すべしと主張したることを擧ぐるならば、今日一般に信せらるゝが如き功利道德の露骨なる利己主義といふ架空談は、到底成立するに難いであらう。畢竟今日に至つて、尙ほ「利己主義、唯物主義、無神論」等の使ひ古るした案山子を以て理智的成人を威嚇せんと欲することは、之を斷念しなければならぬ。斯の如き怪物は精神的未成年若くは思索的老嫗に對してこそ、依然として多少の威嚇的效果を有すべきも、成熟者に對しては全然其效を示すことが出来ない。若し功利主義にして、之をペンタムに見るが如き博愛的愛他主義の花を咲かすことが出来るものならば、世にはまた、吾人が冒頭より囁地に「彼を呪へ」を浴びせ掛くべき哲學的原理は、決して存在しないのである。

十二、コムト

世人が一般に斷定せんと欲するが如く、愛他主義は思索的理想主義の特權であるとするものの、如何に謬れるものであるかの明證を吾人に提供するものは、オーギュスト・コムト（一七九八—一八五七）の實證哲學的社會學である。一切の神學的なるものと互に不俱戴天の敵であり、凡ての形而上學的なるもの、粉碎者であるコムトは、その社會倫理説の最後の形相に至つて、殆どカントと相接し、彼れの社會的義務概念は、辛辣嚴苛に於いて優にカントの至上命令と先を争ふに足るものがある。更に彼が未開民族間にありては、一個の社會的事實として之を承認するの止むを得ざりし個人的利己主義に對し、彼はその哲學の最後の局面に至つて懸命に之を排撃し、根本的に之を勦滅せんと努力すること、寧ろカントにも過ぎて居た。若し彼れの社會哲學的理想が實現せられたならば、換言すれば、若し彼によつて肇基せられたる人類の實證哲學的時代が、現今尙ほ依然として天下を支配しつゝある形而上學的時代と決定的に交替すること、猶ほ曩に形而上學的時代が神學的時代を見事に征服したるが如くならば、其時こそ純粹なる愛他主義の眞個の黄金時代が始まるであらう。而して又コムトの道德的原理が、決して制御すべからざる神學的源泉、若くは矛盾に満ちたる形而上學的源泉に發せずして、専ら經驗に基いて觀察せられたる源泉より進るものなることを合はせ考ふれば、かのコムトを以てデ

カルト及びライプニッツの上位に置かんとしたるジョン・ステューアート・ミルの誇張的判斷も、批判的には多少の疑義を容るべしとは謂へ、心理的に見れば決して無理でないと言はねばならない(註一五)。

吾人が本書に於いて論せんとするは、彼れの「實證哲學講義」の最後の三卷、即ち「社會物理學」と概念附けられて居る社會學である。抑も六種の科學(數學、天文學、物理學、化學、社會學)の階段に於いて、社會學は最後の即ち最高の地位を占める。社會學は凡ての精密科學の仕事に加冠すること、猶ほ、哲學の仕事に對して然るが如くである。而して吾人は、本書の開卷に於いて社會學の定義を下して、それは社會的生活に對する科學的至上命令を制定するものと爲したことに鑑みれば、吾人がコムトに於いて始めて社會學の眞個の創建者を見出だし得ることは、何人も之を首肯するであらう。曩にヘルダーに於いて尙ほ明瞭なる概念化を缺くの憾があつたところのものは、今コムトに至つて、精透せる科學的洞察に凝成したのである。

コムトによつて「社會學」といふ、決して適切と稱し難き名稱に於いて洗禮を授けられたる科學の中心問題は、彼に取つて、前時代若くは同時代の法律哲學者及び國家哲學者に於けるが如き抽象的な法律、又は一層抽象的な國家ではなく、實に人間の社會そのものである。

コムトは「歴史的方法」に決定的強調符を置いた。是れコムトを現今の教壇社會主義(所謂「歴史派」と結び付くる接觸點である。彼れの歴史哲學は特にその主著の第四第五卷に於いて之を窺ふこと

が出来るが、その概要はロバート・フリンツの著書に悉くされて居る(註一六)。

「現代の根本形相」を描寫するに、コムトは獨逸哲學者フイヒテと別個の線を以てした。コムトに隨へば、形而上學に支配されたる吾人は、一種の理智的並に道德的無政府状態に沈淪した。(第四卷三八頁以下)。代言人と新聞記者との紛々たる仲間相競うて筆舌を弄して居るが、畢竟政治的の絞醫者が、廣告の聲を大にして顧客を釣らんとするものに過ぎない。病篤き社會的有機體に於いて、彼等の百方の治療は寸效を示さない。何となれば彼等は單にその肉體的の病患を注視し、隨つて亦一時的の效果あるに止まる藥餌を與ふるのみであるからである。然かも精神的靈藥によらなければ到底恢復の見込みなき患者は、理智的並に道德的の病苦の爲めに氣息奄々として居る(第四卷一一二頁——一三〇頁)云云。而して社會主義の實驗家が(唯だ一時的に有效なる)經濟的推移に於いて之を發見し得たりとなして得意なる萬能妙藥を、コムトは普遍的なる科學的世界觀に求めようとする。一種の道德的再生に等しき、社會の漸進的社會化は、獨り科學の能くするところである。(第四卷一四一頁、第五卷五三八頁以下、六卷七三六頁以下)。科學の至上命令に内在する論理的強制力によつて、人類は次第に「一時的秩序」若くは物質的秩序を出で、「精神的秩序」に遷り、斯くして一個の純粹に愛他的なる社會に轉成することを得るのである。而して、過去に於ける神學的並に形而上學的時代の騎士等が、竟に其功を遂げなかつた人類の社會化といふ大事業を成就することは、産業的社會、技術の騎士の双肩に懸る

任務である。

三九八

コムトの社會哲學に於ける實證的部分の眞個の臺架を爲すものは、就中次の二つの思想である。即ち社會靜學に於いては、恒常的存在條件、換言すれば嚴正なる合法性、社會動學に於いては、あらゆる社會的事象の規則正しき發展である。而して此の合法性は、一個の永續的（社會的恒久性若くは社會的連續と呼ばれる）のものであり、發展は直線的に前進し、上方に向けらるゝものである。靜學は社會的事象の解剖、動學はその生理を示して居る。明瞭なる進化論者ではないが——彼はラマルクの進化説の反對者である——然かも彼は、社會的進歩が否定すべからざる事實にして、社會學の根本法則であるとする見解は、之を奉じて居る。彼に従へば、吾人人類を動物と結び付くる利己的天性は、文明の全線に互つて明白に退却し、人道的感情が之を代へる。文化人においてには理智的機能が不斷に向上する間に、植物的並に動物的功能は益々減退する。而して單に知識の總計が増加するのみならず、亦同情（愛他的）の種々複雑なる發露も、同様に斷えず増加の勢を示すものである。人類の進化方向は常に上昇する。文化が時としては動搖するが如く或は又逡巡して進まざるが如き外觀を呈することあるも、それは悉く社會の有機組織に於ける一時的血滯に過ぎない。社會は暫時的に發生するあらゆる退歩的潮流に拘はらず、益々自己を完全の域に進め、連帶性を増加し、自己を醇化し、斯くて前途に多くのものを約束する進歩の見込を確實に握つて居るものである。若し一朝實證哲學によつて、

精神的秩序の確立を見るときは、社會の社會化、換言すれば自然状態にありて獨り其威を擅にする利己主義（個別的利益）を制御し、科學を基礎とする連帶感によつて社會の中に育成せられ純一に共同幸福の建設に努力を向くるところの社會感情をして、かの利己主義に代はらしむることは、手を下さずして自ら行はるゝであらう。然らばコムトは如何なる途を辿りて、所謂社會靜學と、之を基礎として建設せらるゝ社會動學とにより、上述の如き社會の社會化、斯くの如き「全體の精神」の體系的養成を實現せんと欲するか。是れ彼れの社會學說の細項であつて、之を詳論するは本書に於ける吾人の任務であり得ない。赤裸々なる功利主義に對する反感に至つては、コムトは思辯的哲學の倫理學者に比するも決して遜色がない。のみならず彼は、寧ろストアと等しく、自己保存衝動と相並んで活動しつゝ而かも之れを制馭するところの元本的社會衝動の存在を認めて居る。彼は生理的に此社會的衝動を、ガル及びシュプルトハイムと共に、腦髓の中に存在する社會本能に歸せしめ、心理的には——ヒューム及びアダム・スミスの説を繼承することを明言して——「同情」の（愛他的）感情に歸せしめる。ヒュームと同様にコムトも亦、感情に與ふるに、認識以上の優越を以てする。斯くして個人の正當に權利附けられたる獨自生活と、之を超越して立つところの人類全體の利益との間に完全なる平衡を成立せしむべき任務が「實證」哲學に生じ來る。而して次第に向上する睿智及び之より生ずる「同情」が件の平衡を確立するであらう。

併し乍ら人類の社會は、之を調整束縛する命令無しには、到底成立存続することが出來ず、而して過去に於ける神學的至上命令が、獨逸古典的哲學によつて規定せられた思索的至上命令と同様に、次第に其效力を失ひたりとすれば、爾後社會をして、無政府放縱に墮落しその原子に分裂し去ること莫からしめんが爲めには、獨り、科學的至上命令の血路が僅に尙ほ殘存するのみである。所謂「進歩的獨裁」は頗る迅速に「社會」を社會化するであらう、換言すれば社會の風習思想を社會的要素の側に轉向せしむるであらう、而して斯くの如き風習思想は、それに適應せる法律を伴生せしむるであらう。社會問題の政治的方面に於いては、コムトはその年長の友サン・シモンの如く直接なる關與を敢てしなかつた（コムトがシモンの影響感化を蒙つたことは恐らくは彼自身が告白するより多かるべく、彼れの末派が告白するよりは更に一層多い）。實際政治の喧囂に快心を見出だすには彼は餘りに理論的にして思索的なる頭腦であつたことも、其一因である。勿論彼と雖も時としては、無産階級者こそ彼の教義の最初の精通者となるであらうといふが如き口吻を洩らしたことがないではない（第六卷五三〇頁）。然しながら斯くの如きプロレタリアに對する呼び掛けは、要するに彼がサン・シモンの秘書たりし時期の微かなる遺韻に外ならない。大衆の眞唯中に向つて自己の思想を直接に鼓吹するが如きは、彼れの精神貴族的天性と相容れざるところであつた。随つて彼は所謂「實證的宗教」の創立と完成によつて特色附けらるゝ晩年の神秘的時期に至つて、一種の政治的無爲主義に陥つた。此無爲主

義は彼れの末流が、今日に至るまで依然として之を擺脫することが出來ないものである。

コムトが彼れの師匠たるサン・シモンに對して支拂つたものと同様なる貨幣を以て、嘗ては彼れの徒弟にして崇拜者であつたジョン・スチュアート・ミルから償還せられたのは、蓋し歴史のネメジス(Nemesis)——希臘古代の調整的正義の女神——の配劑と謂はなければならぬ。「世界歴史に關し前後二卷に亘る廣汎なるコムトの發言の中、一句と雖も新奇にして獨創的ならざるものなし」と誇張的なる讚辭を陳べて居る「オーギュスト・コムト及實證哲學」の辯疏的著書に次いで現はれたものは、完全なる絶交を以て終つた兩者間の悲痛なる書簡應酬であつた。

十三、ミル

ジョン・スチュアート・ミル（一八〇六—一八七三）が、歸納的論理の竣功と古典的經濟學の完成とに關して有する意義を、今茲に詳論することは、事宜を得たるものではない。茲には唯だ、ミルの「經濟學原理」が——イングラムの言に従へば——「現代英國人の殆ど凡てが、此専門學科に於ける彼の知識を掬したる」（註一七）源泉であることを一言すれば足りる。社會學に取つては、彼れの「歸納的論理」の中、精神科學の論理を取扱つた其第五篇が特に裨益するところ多かつた。茲で最も吾人の興味を牽くものは、社會の定義である。曰く、「社會の状態とは、凡ての大なる社會的事實若くは現象

の、時を同じうする状態を謂ふ。此等の事實若くは現象に屬するものを擧ぐれば、一個の共同體若くは其中なる各個階級に現存する知識及び精神的並に道德的教養の程度。産業の状態。富の分量及びその分配。共同體に於ける各種の慣習的作業。共同體に於ける階級の分立及び此等階級の相互關係。人類に取つて最も重要な諸種の對象に關する共同體の信仰、並に該共同體が、此信仰に對する信頼の程度。審美的進化の趣味、性質及び程度。共同體の政治形式及び比較的重要なる法律並に習慣。——此等のもの及び此他發現するもの、全部の状態が、或る與へられたる時期に於ける社會及び文明の状態を組成する。

吾人が、社會的狀態及び之を産出する原因と稱する時、此等異種多様な要素の間に、一種の自然的相互關係の存在すること、並に此等の普遍的社會事實の組合はせは、決して孰れの任意なる種類も悉く可能といふのではなく、唯だ一定の組合はせに限りて可能である、約言すれば諸種の社會的現象の状態の間に、並存の同形性 (Die Gleichförmigkeit der Koexistenz) が存在する。而して實際上、此は此等現象の各個が他に及ぼすところの影響の必然的結果である。是れ、社會體に於ける諸種の部分の「合意」(Konsens) に含有せらるゝ事實である」云々(註一八)。

以上が、ミルの社會に關する定義の概要である。其他の點に就いて謂へば、ミルはその「論理學」に於いて、徹頭徹尾コムトの呪縛に囚はれて居る。ペインは、ミルが、實際に於いて、毫も、コムト

主義とベントム主義との域を超ゆることなきを指摘した。彼れの思想に於いて、次第に社會主義に接近するその最後の局面すら、依然として曩にコムトが描出したる線の跡を辿つて居る。ミルは民主主義より社會主義に至る彼れの推移を、その「自叙傳」の中に鮮明に叙述した。

スタンリー・デヴォンスは、其著「科學の原理、論理學及科學的方法に關する一論究」並に、「經濟學理論」に於いて、ミルに對する鋭峻苛酷なる批判を試みて居る。彼は論理學者ミルに於いても、社會學者ミルに於いても、秋毫の獨創性を認むることを欲しないのである。併し乍らデヴォンスがミルの貶黜に偏するは、恰も半世紀以前まで殆ど凡ての科學の代表者が、専ら彼れの神聖化に失したる一般である。吾人の觀るところを以てするに、これに對する偏頗極る過褒と過貶との間に穩健なる中庸を得んと試みたるマーシャル(註一九)の説、最も正鵠を穿つものゝ如くである。成程ミルは實證主義に於いてその深みを増したといふことは出来ない、併し、實證主義哲學の勢力範圍の境界線を劃定し之を固持したるの功は、決して彼に拒むことを得ない。

灰色の理論から潑刺たる現實への橋を架くることは、コムトの社會學之を爲すこと能はず、スペンサーの社會學之を爲すことを欲しなかつた所である。然るに今ミルは、思索家に取つて頗る危険なる行動、即ち理論より實行への進展、換言すれば社會的思考より社會的運動への轉化を、横溢する勇氣を以て敢行した。しかのみならず彼は、唯物主義的に方向附けられて居る友人後輩に反して、人類の

社會化過程に於ける倫理的要素を、高唱力説し、吾人をして社會哲學者中の最も同情的なるもの、中に彼を算ふることを得せしむるものがあつた。彼れは「社會的倫理」に於いて、その社會主義への傾向に拘はらず、從來唯物主義史の著者ランゲが、ミルの「自由論」を世界文學の最も卓絶せる雄篇中に數へた程、「自由」といふものを重視し、之れが哲學的根據を説明せんが爲めに、熱情的にして魅力ある語調を見出だして居る。彼れの穩健なるマルサス主義、並に彼れの累進的相續税の提案は、之を實際に施して毫も支障を見ざるべき健全なる社會倫理的思想を包含する。

十四、スペンサー

ハーバート・スペンサー(一八二〇—一九〇三)は、實際的社會政策家としてミルとは正反對なる途を辿つた。ミルが自由主義から社會主義へ轉向したに反し、スペンサーは、一個の社會主義者から今日も尙ほ依然として活動しつつある個人主義的自由主義の最後の代表者となつた。即ちスペンサーは、其著「社會靜學」(一八五〇)に於いて——コムト及ミルの影響を受けて——土地國有を熱心に主張し、更に彼れの「社會學」(第五百四十一節)に於いてすら、尙ほ依然として微温的ながらも之に賛意を表したに拘はらず、次いで、「倫理學原理」に及んで、彼れの壯年時代の社會主義的「迷妄」から全然脱却した。

スペンサーによつて立てられた「綜合哲學の體系」の輪廓は、彼れの社會學の理解に對する最善の手引を與ふるものと謂ふことが出来る。スペンサーが、三十年前に既にその綱要を明瞭確實に發表したる此不磨の名著は、今や首尾よく完結せられた。その第一卷の「第一原理」(一八六二)、は彼れの綜合哲學の體系と方法とを示すものである。此書に於いて、超越性的世界、並に空間、時間、物質、力、運動、感覺、自我等の科學的基本概念の經驗不可能性が、ドグマ的確信を以て論斷せられ、而して之と共に、彼れの獨得なる世界觀(不可知論及び相對論)の基礎が定められて居る。スペンサーに隨へば、材料と運動とが凡ての現象の基本要素である。凡ての持續は曩にライブニッツが既に觀じたるが如く、無限に小なる運動である。材料と運動とは「進化」及「分解」の兩要素の方向に分離する。進化とは運動の「擴散」を意味し、材料の「合一」(Integration)——一個の全體への合同)が之と結び付けられる、而して、分解とは、運動の吸収(absorption)を意味し、材料の分裂(Disintegration)——相關の消滅)が之と結び付けられる。而して、不定的なるものより確定的なるものへの不斷の過渡が行はれ、實際運動の吸収と材料の分裂及分化が結び付けられる。斯くて材料は不定的にして不相關的なる同種性より、運動の吸収によつて、確定的にして相關的なる異種性へと推移する。此の基線に隨つて、スペンサーは現代に於いて彼れの興味を牽く知識材料を整頓し、自己の公式の中に當て嵌めたのである。第二卷及第三卷は第一卷に於いて下されたる公式を嚴密に遵守して、「生物學原理」

(一八六三—一八九九)を取扱ひ、第四卷及第五卷は、「心理學原理」(一八七一—七二)を取扱つて居る。之より以下(即ち第六卷乃至第十卷)スベンサーの全思想的勞作は、社會學(第六卷乃至第八卷)及び倫理學(第九、第十卷)に捧げられる。此の大著は、一八九六年十一月に完成の域に達した。即ち社會學に於いて、スベンサーは進化の新しき要素として「超有機的」なるものを取扱つて居る。即ち曩にシュライデン(一八八一—八二年歿)が植物の細胞を、シュワン(一八八二—八三年歿)が動物の細胞を發見し、而して、ダーウインが友人の徳通に従つて「自然淘汰に由る種の起源」(一八五九)を公にして以來、スベンサーの思想には決定的の變轉過程が行はれた。既にコムトはプラトン及びアリストテレスの説を踏襲して、社會を一個の有機體と解し、而して單獨個體の生理的方面を探究するところの生物學を以て、かの人類を一個の社會的全部として取扱ふところの社會學の一階梯に外ならずと認めたる(註二〇)。即ち生物學が「個々の有機體」の進化過程に於ける適法性を研究するを以て任務とするならば、既にコムトの説に隨つて、社會學には同一なる適法性を「集合的有機體」に於いて探究するの任務を生ずる。而してヘッケル(一八三四—一九一九)がダーウインの境地より更に一步を進め、一個の普遍的創造史を建設せんと欲したるが如く、スベンサーも亦ダーウインの「生存競争」の公式より出發し、更に此公式に添加するに、曩にダーウインも之を承認採用したる「適者生存」の目的論的補遺を以てしつゝ、彼一流の「材料の合一及運動の分解」の公式を基礎に据えて社會の創造史を述作せんと

試みたのである。斯くの如くにして、スベンサーの社會學は堂々たる社會形態學にまで發育する。スベンサーの觀る處に據れば、細胞より成る一國家は、獨り人體といふ有機體のみではなく、國家的有機體も亦細胞(社會的)より成る一個の國家である。此社會的細胞は二個の因子によつて條件附けられて居る。即ち外面的には氣候、風土、植物界及び動物界、内面的には人間(即ち社會的細胞)(註二一)の肉體的、感情的並に理智的特質、是れである。此點に於いて彼がコムトの説を採つて居ることは明かである。既にコムトは社會と有機體との等視に當つて、彼の謂はゆる等視(Gleichsetzung)は、ラマルクが動物形態の進化に關して立證したると同様なる意味に了解することを欲せざる旨を言明した。而かもコムトが不知不識の裡にラマルクに立脚すると反對に、スベンサーの進化説は明瞭に意識してダーウインに立脚する。スベンサーは、コムトが眞先きに、社會的體形は人工的に産出せらるゝものに非ずして一段一段と進化するものであるといふ事實を認識し公式化したる功を嘖々として稱揚して居る。而して有機體自身が一個の社會であるが故に、隨つて社會も亦一個の有機體であるとするならば、此有機體は、必ず、その社會的生長、その社會的構造、機能、器官體系を有する筈である。かくて彼は類推癖の動くに任せて、社會的有機體に於ける榮養體系、分配體系及び調節體系といふことを述べて居る。(併し乍ら、此類推は、多く動物の身體に適用するけれども、植物には當てはまらない。)即ち商業及び交通の代表者たる生産階級、軍人階級、並に之より生ずる統治的權力が、夫れく

榮養、分配及び調節の各體系に相對應する。彼れの社會學は特種への分化を全然看過し、動物世界と人間の社會組織との間の類推を極端に推し擴めて、遂に、社會的有機體の構造に就いても亦外胚葉、内胚葉及中胚葉等が云爲せられて居るが、(二四九節以下)、此社會學全三卷の精髓は其の第二百三十八節に存する。同處では、スペンサー獨特の明快さを以て、彼れの社會學の臺架の全部が示されて居る(註三)。曰く「稍々高級なる腔腸動物に在りて、吾人は一種の複雑なる組織に逢着する。細胞の單一なる層の代りに、外部及内部とも二重層があり、而して此兩方の二重層の間に空房がある。此空房は既に此型の動物が初めて發生した時に、胃室の一部から分離せられるものであるが、其高級なるものに至つて完全に獨立性を有する。斯の場合に外部の二重層は體壁を現はし、内部の二重層は榮養房を圍み、而して兩層間の空房は、攝取せられたる榮養資料を以て満たさるゝもので、所謂「内臟周圍の空房」(Perivisceralhöhle)である。而して上に記したる、中間に原形質を包藏する二個の單一層は、高等動物に於ける外部及内部の體系の一類似物に過ぎないけれども、次の、中間に空房を有する二個の二重層は、高等動物に於ける外部及内部の體系と對應するものである。何となれば、進化の長き經過の間に、件の外部の二重層は、骨格並に神經及筋肉體系、感覺機關、保護構造等を發生せしめ、一方内部の二重層は、自體の内部の空所全部を占領する數多の機關を依存せしむる榮養管に化成するからである。」

獨逸の社會學者は、「社會問題」に對して何等の黨派的成心を挾まずして觀察を下すこと甚だ稀である。吾人が、爾餘の科學部門に於いて當然自明の要求として提出する無成心と沒個性とは、社會學の如く僅に羽毛を生じたるばかりであつて、現にその存在の資格を獲得すべく懸命の努力を爲しつゝある若き科學に在りては、言ふに易く行ふに極めて難い。吾人は個人として社會學の諸問題の中に捲き込まれ、その解決に於いて個人的に利害關係を有する。「社會問題」及び其の解決が、最も内部の神經に於いて吾人を掴むことは、化學若くは物理學の問題と全然趣を殊にして居る。かるが故に社會學には單に國民性の土の香——殊に國民性の問題其自身が社會學の領域に屬するを以て——が飽くまでも付き纏ふのみならず、之と相並んで亦社會學者自身の熱き呼吸が掛かることを常とする。數學の如き科學に取つては、獨り國際性のみならず、非人格性を帯ぶるに至ることも亦頗る容易である。然るに「社會問題」は、直に吾人の最も内面的なる生活と交渉を有するものであり、隨つて今日十人の社會學者あれば十様の社會學が存在する状態であることに對して、世人は之を正當と認めざる迄も、決して甚しく之を異としない。而して現今、英國人が、其の國家状態に於いても、個人の正當なる主張と公共の要求との間に最も幸福なる綜合調和を見出だして悠々たるが如く、社會問題の取扱に際しての非個性的なることに於いて最も進歩して居るのも、同じく英國人である。

「公共」都市「都市國」「ヘレネ」種族、「羅馬」種族——是等のものが凡てを意味するに反し、個人は

それが政治的若くは科學的天才に非る限り無價値無意義のものとして蔑視抹殺せらるゝを常としたる古代の世界觀に對する、完全にして意識せられたる對立に於いて、アルビオン（ケルト人の英國に對する稱呼——譯者）の兒孫は、由來個別的のものを一般的のものよりも、個人を國家よりも、實際を理論よりも、具體を抽象よりも高く評價した。羅馬大帝國の如く、僅に地中海一帯を掩有するに止まらず、眞個の世界帝國と爲つた大英國が斯くの如く覇を成したる所以が、果して如上の個性と具體との重視の結果であるか、將た又、之に拘はらず克く然るを得たるかの問題、換言すれば、英帝國の由來が英國的個人主義の原因に負ふ所ありや否やの問題は、今評論の邊を有しない。兎に角政治的理論と政治的實際との握手は、英國に於けるを嚆矢とする。英國のモナルコマッペン派——ミルトンを絶頂とする——は、人民主權の民主々義的問題を科學的議論の首位に推し進めた。英國の政治家——クロムウェルを首班とする——は、單に如何にして革命を起こすべきかの方法のみならず、亦如何にして革命を制馭し、人民全體の福祉の爲めに之を健全なる進化の道途に誘導すべきかの方法を、教養ある民衆に訓へた。

かの「階級闘争」の理論すら英國の領土内に起草せられたことは、亦以て一個の歴史の好讒と謂はなければならぬ。筆者は謂ふまでも無く一獨逸人カール・マルクスである、而かも彼は半生の久しきに亘つて英國の遇客友誼を享受し、英國經濟の研鑽によつて、彼れの階級闘争論の形成に到達した

のである。

マルクスが尙ほその階級闘争論を潛思琢磨しつゝあつた間にチャールズ・ダーウィンとハーバート・スペンサーとは、第十九世紀後半に於ける有識者の世界全部の合言葉となつた「生存競争」「適者生存」の生物學的公式を完成した。階級闘争論の代表者カール・マルクスと「生存競争論」の哲學的代表者ハーバート・スペンサーとは、恰も、當年巴里に於けるサン・シモンとフリーリエーとの如く、毫も個人的に若くは事業的に接近することなしに、倫敦に於いて數十年の間肩を並べて活動した。歴史、皮肉——ヴォルテアの好讒に隨へば「偶然陛下」——は、マルクスとスペンサーとを、生活と事業とに於いて會同せしめて、吾人に歡呼喝采せしむることを欲しなかつた。假に此事ありしとするも、恐らく彼等は個人的にも事業的にも互に相排斥したであらう。カール・マルクスは、竟に一度もハーバート・スペンサーの視野に入つことが無いことは明かである。然らざれば、日給雇人式の翼たる細心を以て自叙傳中に一切無差別に取扱つて居るスペンサーが、苟もカール・マルクス其人の如き人物を顧みることなく、無言のまゝに通ら過ぎたといふことは、到底考へられないからである。之に反して、篤實なる研究者として、博覽強記するマルクスは、勿論スペンサーの著書を識り、スペンサーの非國教主義的自由主義に於いて、彼れ自身の政治的並に社會的好敵手を認めて居た。然るに、スペンサーの著作中には、カール・マルクスの存在に就いて、一毫の痕跡をも見出すことが出来ない。「資本論」の著者

は「綜合哲學」の著者をして、眞摯なる考量を拂はしめ、或は更に進んで後者の少年時代より根ざしを固めたる政治的觀念を確信との訂正を伴ふべかりし幾多の事實を、後者に語るべき筈であつた併し實際に於いて、此事は起らずに終つた。「資本論」は、獨逸語に於いて發表せられた。而して自ら獨逸語を解しなかつたスペンサーが、秘書をして此書を反譯せしむることも無かつたのは明かである。斯くの如くにして階級闘争の哲人は、生存競争の哲人の傍を跡も無く通り越した。

歴史的且發生的の方法に隨ひ、余は階級闘争の理論に入るに先だち、この歴史的由來を探究する。凡そ階級闘争理論の元祖はエフェゾスの晦澁哲學者にして進化論的世界觀の創始者なるヘラクリトスであり、而してハーバート・スペンサーは、その最も雄辯なる代言者にして且つ最も成功せる祖述者である。五十餘年前に發見せられたるヒポリトス（羅馬の監督長老、紀元二百三〇年頃没。著書多し）の著作遺篇によつて、初めて吾人に紹介せられたるヘラクリトスの驚異すべき數簡（バイウォーター編、哲學叢書第四十四及第八十八卷）は、正に科學としての社會學の誕生日附と看做すことを得るのである。ヘラクリトスは曰ふ「戦争は凡ての物又は本質の父にして王である。戦争は或者を神、或者を人間と證據立て、或者を奴隷、或者を自由人と爲した。」此の「戦争は萬事の父」は、吾人が既に論じたるが如く「適者生存」の社會學的典型である。ヘラクリトスは更にいふ「戦争に於いて命を殞したる者は神人共に之を尊敬す、事愈々大にして、譽愈々高し」。而して、ゴムベルツ（著者「希臘的思想家」

第二版第一卷五九頁）は、ヘラクリトスの此社會學的斷篇を解釋して、力の試査と證明とによつて、能不能は區別せられ、國家は形成せられ、社會が組織立てらるゝといふ意味となして居る。又ハーバート・スペンサーは、今方に人類の産業的的典型と其地を換へんとしつゝある人類の戦争的的典型に、恰もヘラクリトスの戦争公式と同一なる「淘汰」の役割を與へた。即ち一條の歴史的直線が、ヘラクリトスに發し、ホッブスの「凡ての人の、凡ての人に對する戦争」を経て、マルサスに於ける「算術的及幾何學的級數に反比例する生存條件の爲めの競争」といふ生物學的公式に至るまで、連綿として通じて居る。而して、明白にマルサスを基礎として立つダーウインの「生存競争」及びハーバート・スペンサーがダーウインよりも遙に以前に唱導したる「適者生存」の公式は、一直線にカール・マルクスの「階級闘争」及びゴビノー（一八一六—八二。有名なる「人種不平等論」の著者）グムブローグ（一八一九—〇九。「人種戦争」の著者）エイチ・スチュワート・チェムバレン（「第十九世紀の基礎」の著者）諸家の「人種戦争」にまで繋がつて居る。

生物の「生存競争」といふ公式は、ハーバート・スペンサーがその宏壯なる世界觀の構築に於いて、ダーウインの「自然淘汰」の學說を一個の特殊の場合として、彼れの普遍的進化論の中に攝取整頓することに成功したる時に至り、甫めて彼れに取つて有意義のものとなつた。スペンサーは其の自叙傳（此書の獨逸譯は、余及余の女兒ヘレーネの合著として、一九〇五年に出版した）第二卷第三十九章に於い

て、從來單に同種類の一事例として何等の交渉なく特立するが如く見えたるダーウインの「自然淘汰」説を、自己の「合一」及「分化」材料及運動の別種分配の普遍的進化公式の中に攝取整頓することを得たる時日——一八六四年六月九日——を明記して居る。此時以來彼はダーウインへ「自然淘汰」に代ふるに「適者生存」を以てした。此の「適者生存」の生物學的現象は、彼れの觀る處によれば、それが物理學的現象と正しく融合するを得るに非る限り、十分に吾人を満足せしむるやうに理路一貫して居ると謂ふことが出来ないと思へられた。何となればスペンサーの嚴正に不可知論的なる一元主義は、恰もヘルダーの進化一元論と同様に、宇宙の統一的解釋を要求し、自然と歴史とを、性質を異にする二個の部分に分離することなく、歴史を以て普遍的自然律の一截片、一特例、若くは一種の擴張或は豊充と觀じた。即ち歴史は、ヘルダーに取つてもスペンサーに取つても自然其ものであり、唯だそれは進化の一段高き階程に位するといふに止まる。それ故に普遍的の物理學的法則は、生物學に於いても社會學に於いても等しくその妥當性を確保する。即ち社會學的現象が之を生物學的現象に遡源せしむること能はず、生物學的現象が更に之を物理學的現象に融合せしむること能はざる限りスペンサーより之を觀れば、如何なる科學的説明若くは理路も頗る不満足なるものに過ぎない。是れ彼がダーウインの「生存競争」の公式を迎ふるに、語調稍々低微であつた所以である。何となれば一八五九年の當時、彼は尙ほ未だダーウインの生物學よりスペンサーの進化論に到る途を看得しなかつたからであ

る。然るに一八六四年に至つて、かの平行四邊形の法則——世界のエントロピーは一個の最大數に向つて進むとするクラウジウスの學説——は、生物學より物理學に到る橋を架するものであるとの思想が忽然としてスペンサーの腦裡に浮んだ。而し彼をして此思想を確信せしむるに效ありたるものは、彼が非常に尊重したるエルンスト・フォン・ベル（一七九二—一八二六）の目的論（有機體は、其の進化に於いて常に完全なる有機體に成り上らんとする努力を現はしつゝありとする説——譯者）、及び特に英國のシェリング派學者コールリッジ（一七七二—一八三四）の諸著作、就中その「生の觀念」の研究によつて紹介せられたるシェリングの自然哲學の思想に於ける深い造詣であつた。

斯くて一八六四年、平衡の理論によりてスペンサーが完成したる綜合は、次の如き結果を示した。（社會學、獨逸語版第二卷五八頁）、即ち自然界に於ける一切の變化は、常に一個の平衡状態に歸着せんとする傾向を有する。絶對的平衡即ち靜止への途上に於いて、多くの場合に不安定平衡が生ずる。換言すれば全體の維持に役立つが如き行爲を各個になすところの、而して相互に依存する、幾多の部分の一體系が生ずる。凡ての生命ある有機體は、斯くの如き不安定平衡を示すものであり、此平衡の破絶は即ち死を意味する。各々の種は、之に屬する各個體の中で平衡が他の個體よりも動搖の危険に暴さるゝこと少なく、随つて他の個體よりも長く自己を保存するものをして居る。此等の個體こそ他の平衡機能の状態が彼等に比して劣弱なる一個體の死後も生き残る「適者」であり、若くはダーウイン

の語を借りて謂へば、自然によつて選抜せられたる優者である。即ち個體の存続を以て、彼れの動搖し易き平衡——或る個體に在りては何等かの偶然なる原因によりて忽ち破壊せられ、或る者にありては之に反して「種」の増殖の爲めで永久に保存せらるゝ平衡——の維持と解するならば、吾人は選ばれたる優者の存続及び増殖が、一個の純粹に物理學的なる過程、換言すれば、質料と運動との普遍的散布に於ける一種の複雑なる形式の直接成果であるを解釋するを至當とすることを看取する云々。斯くの如く社會學的現象を一般的有機生物的現象の中に包括し、而して後者をば更に純粹に物理學的なる現象の中に屬せしむること、即ち生物學と物理學との同視に於いて、ハーバート・スペンサーは、かのイオニア自然哲學者の素朴無反省的に始めたかの人間の哲學的思考の原型へ復歸したるものに外ならない。即ちイオニアのアナキシマンデルが、終りなきもの、限界なきもの自然界及精神界に於ける凡ての變化の究極の統一的基礎と名づけたるものは、スペンサーの「不可知なるもの」である。更にアナキシメネスが濃粗の機械的二重過程と呼び、而してアナキシメネスの視述者なるアポロニアのディオゲネスに隨へば、根元本質のあらゆる變化形式の根柢に横はる此の過程は、今日物理學に在りては引力及び反撥力、化學に在りては親和力又は化合力と反化合力、生物學に在りては收縮性及び膨脹性、社會學に在りては同情と反感、而して最後にスペンサーの一般的公式に在りては、合一及び分化として、吾人に知らるゝところのものである。スペンサーに於ける質料及運動の兩屬性は、恰もスピノー

ザに於ける延長及思考の兩屬性が永久に平行して走ると同様に、相互の間に合一及分化の嚴正に比例的なる關係を有する。併し乍ら既にエムペドクレスに在りても亦愛と憎とが循環的律動に於いて交互代謝し、此の代謝よりしてかのアナキシメネス以來哲學に於いて一般に認められて居るが如く、世界破壊と世界形成との定時的交替が生ずるとせられて居た。

「階級闘争」といふ、狭ばめられたる限界に於いて吾人に逢着する世界の永遠なる闘争公式は、既に印度人の間に於けるアトマンとブラーマン、ヴィシヌとシヴァ、波斯人に在りてはオルムツトとアーリマン、而して吾人の文化體系に在つては天國と地獄、神と惡魔乃至基督反基督として、此世に流布して居たものである。凡そ調和は必ずあらゆる對立抗爭の克服を基礎として成立するものであるといふ考は、人類最古の神話を有するオルフォイス教團の教弟が既に之を採用し、而してピタゴラス學派の巨頭フィロラオスが恐らくバピロン及アッシリア時代の思想を模範として定めた十種の對立表の中に、ヘラクリトスの「争闘及調和の形態」の明瞭なる先例が含まれて居る。ピタゴラスの所謂宇宙音樂其自身と雖も、一音階に合一せらるゝ諸天體の間に於ける對立の克服によつて成立するのである。由是觀之、諸種の對立の並存は、最も古いオルフォイス教的、ピタゴラス的、ヘラクリトスの學說である。

斯の如く外界へ投影する根本對立と相應じて、人間性情其自身の中にも一種の心理的二元が存在する。かの外界に於ける諸對立の概念も、畢竟此人間心理の二元性が必然的に外界に投射するものであ

つて、その起生は實は後者に負ふものであるが如く見ゆる。即ちハーバート・スペンサーはその「心理學」に於いて、意識の基本形成は單に二個あるのみ、思考の凡ての作用の基礎となる「等性」と「不等性」とに従つての區別能力是れであるとなして居る。之を算術の用語に移せば、吾人の心理的基本機能に於ける此二重性は取りも直ほさず、「加ふること」(兩者等しきものとする)及び「減すること」(兩者等しからずと區別すること)を意味する。等しとするこの論理學的表現は同一律であり、等しからずとするこのそれは矛盾律である。論理學的方法論に於いて這般の二元主義は、「綜合及分析」「歸納及演繹」「包括及捨象」と呼ばれる。ハーバート・スペンサーは正當なる誇りを以て、彼れの社會學的基本假定、即ち生物學的法則が社會學的妥當性を要求せんが爲めには、之を物理學的法則に歸着一致せしむることが出来なければならぬとする假定の立派なる證明を即ち自然科學の若干の成果を、舉示することを得るであらう、蓋し、自然科學は上述の如く、心理的並に論理的法則と生物學的並に物理學的法則との一致に關して著しき證明を提供するが故である。即ち等性と不等性、綜合と分析の二重過程は、全自然過程に就いてこれを類推し得る。

今日吾人が自然過程を観るところによれば、自然界の三大領域は互に連帶的關係を有する。植物は例へば鹽の如き無機物を同化して、之を有機的物質に變化する。植物に於ける此の同化能力を、博物學者(ヘルトヴィヒ、ブンゲ、オストヴァルト)は綜合の作用——還元過程と名づけて居る。然るに植物の

中には、日光が謂はゞ貯藏(附加)せられて居る。日光の生活力は植物に在りて熱及光の合併したるものとして現はれ、植物はその攝取(同化)する太陽の活力を張力に轉換する。反對にあらゆる動物的生命は分析の作用を現して居る。何となれば、凡ての動物的生命は燃燒過程若くは酸化過程であり、此過程に當つて張力は活力(運動、仕事、熱)に變せられる。故に植物性の榮養は、動物に與ふるに動物が彼等の體温の調整に要するところの張力を提供し、而して植物の潜在的エネルギーは之と同時に動物に於ける熱及運動の活エネルギーに變ずる。即ち、「萬物の永劫輪廻」といふ千古の智慧——之に對して、ニーチェは「凡ての同一物の再歸」といふ近代的の稱呼を與へたに過ぎない——は、既にモレシット(一八二二—一八九三)が、その著「生命の循環」(一八五二)の中に巧に道破したるが如く、不磨の眞理である。蓋し動物的生命は再び大地の母胎に還り、土壤を肥やし、而して此土壤より發生する植物は更に動物に營養を與ふる。斯くの如くにして永劫の循環は無限に連続せられる。

ハーバート・スペンサーが有機的法律學派(フォン・サヴィニー及びブルンチリ)及び浪漫派の有機的自然哲學(殊にフリードリッヒ・シュレーゲル、シユリング、カール・エルンスト・フォン・ベル、コールリッチ等)と全然同一の意味に把握したる社會學上の有機的方法是、歴史的に上述の點より導來せられなければならない。スペンサーの有機的方法是論理的方法論の一個の特殊例に過ぎない、即ち最近エーレンスト・マッハ(一八三八—一九一六)が其著「認識と誤謬」(一九〇五年)二一七頁に於いて詳論した

る、類推法の範圍、限界並に論理的妥當價值に關する問題の特に社會學に適用せられたる一斷片に外ならない。スペンサーは當年ベーコンが提起したる古き要求を満たしつゝ、類推法の消極的實例を檢討した、而して社會的超有機體と動植物的の單一有機體との間に、一種の「部分的同一性」——目的の一致、各部分の連帶性、その構造及機能に於ける生長及同化——あることは之を認め得るも、「總計的同一性」を確立することが出来なかつた。何となれば動物的有機體に在りては、その諸部分(肢)は有機體全部(體)と直接に粘着合生するに反し、社會及び國家に在りては、人間の利害關係は結合せられて居るが、彼等の身體は左様でない。更に單一有機體は、その諸部分を指導する一個の相關的神經系統中樞、一個の特殊なる感覺機制を有するが、超有機體に在りて、此中樞機關は或は君主又は大統領或は憲法その他の立法に於いて、僅に斷片的にその面影を傳ふるに過ぎず、随つて超有機體の腦髓といふ如きは單に間接的且つ譬喩的のものに止まつて居る。

單一有機體に在りても全然超有機體に於けると等しくヘラクリトスの「戰爭は萬物の父」といふ戰爭公式が正確に通用せられる。世に種々なる對立が並存することはヘラクリトスが簡潔無比なる神託的警句を以て之を喝破して居る。「抗爭は即ち和衷也」「扞格支吾より生ずる無形の調和は有形の調和に優る」「吾人は在り、而して吾人は在らず」「善惡一如」。而かも此等の對立は全宇宙の調和によつて克服調停平均せられる。戰爭は自己目的に非ずして、目的に達せんが爲めの手段である、而して論理的進

化論者ヘーゲルが嘗て、凡そヘラクリトスの言にして彼れの著「論理學」の中に收められざるものなしと公言したるが如く、進化論者の白眉たるスペンサーは、ヘラクリトスを體系的に究極まで思考し盡くしたと自負することが出来るであらう。何となれば、ヘラクリトスの「萬物流轉」や「自然は自己を秘することを好む」の語を想起せしむるスペンサーの相對主義及び不可知論は、對立の並存、合一と分化との物理學的闘争、同化と異化との生物學的對立、「相等しとすること」(加ふること)と「相等しからずとすること」(減すること)との心理學的對立、並に階級闘争や利害衝突や同情及び反感、人類の戰爭的典型と産業的典型、乃至現今互に優勝を争ひつゝある資本と勞働、此等の社會學的對立を知つて居るからである。併し乍らスペンサー及びヘラクリトスに取つて、階級闘争は凡ての戰爭と等しく内在目的論的であつて、機械的でない。謂はゞ戰爭は適者選擇の爲めの自然の教育手段たるに過ぎない。最終目標は全然ヘラクリトスの場合に於けるが如く、「調和」に存する。物理的に解すれば、此の調和は平衡状態である。平衡への努力が無生物界と生物界との全般を支配する。

有機體の個々の生命に於ける「存在の爲めの闘争」が一種の淘汰法則を意味し、随つて「生存競争」が單に此全過程の手段に過ぎず、之に反して「適者生存」はその目的である——ダーウィン||スペンサーの法則に於いて、前者は機械的||因果律的、後者は目的論的原則を表示する——が如く、スペンサーに隨へば超有機體に在りても亦、階級闘争は更に一段高き文化に到達せんが爲めに避くべからざる手

段である。故に戦争の典型は「人間」と稱する典型の向上陶冶の爲めに已むを得ざる推移階程であつた。「國際的争議は社會の構造の發達を著しく促進した」とはスペンサーの社會學(第四百三十五節)に明記せらるゝところである。彼は更に筆を進めて曰ふ、弱者の強者に對する完全な屈服は、幾多の時代、幾多の方處に於いて必然避くべからざるものであつた。社會の型は、その單位の性質によつて條件附けらるゝ。若し、此等單位にして食人種であるならば、社會相互間の集團的行爲も亦殘虐無殘であるに違無い。併し乍ら動物界に於いてすら、種族保存は自己保存の上に置かれてあるが故に、隨つて亦社會の保存は個人の保存よりも先んずるであらう。由是觀之、自然より吾人に賦與せらるゝ階級闘争の眞意は、個體の保存に在らずして専ら種の向上に存すと謂ふことを得る。凡そ一個の社會の存續を助成するのは、悉く階級闘争によつて贏ち得らるべく、之に反して社會の存續を妨ぐるものは、悉く避けられる。

スペンサーはいふ(社會學第四百二十八節)有機物の全世界に於いて行はるゝが如き生存競争は、進化の缺くべからざる補助手段であつた、その意味は、單に同一種族に屬する多くの個體間の競争に於いて、適者の殘存が一段高き典型の發生を促すの效果を示したといふに止まらない。吾人は亦異種族間に於ける不斷の戦闘が、生長と組織との主要原因であることを看取する。普遍的苦闘なしには、生活力の發展は到底不可能であつたであらう。

此の「普遍的苦闘」に於いて「社會的階級闘争」は、社會に取つて一個の特殊例であること、恰も個體に取つて生存競争の然るが如くである。「血みごころなる齒と爪とを以て」、自然の無情なる陶冶は、あらゆる生物——特に人間——に對して生存競争を強要した。何となれば此の闘争の結果、戦争の機能は、機關、即ち吾人をして此の避くべからざる戦争の遂行を容易ならしむる武装を造り出したからである。而してスペンサーに隨へば(社會學第四百二十八節)社會的有機體に關しても同様なることが適用せられる。個々の社會の生存競争こそ彼等の進化を促したものである。但し此の生存競争は、戦争の典型に在りて、種族間及國民間の闘争であつたに反し、産業的、資本主義的時代——斯かる戦争を決定するに、劍を以てせずして筆を以てし、流血の戦を以てせずして平和なる契約を以てせんことを欲する時代——に至りては、社會的團體が彼等の自己主張と平衡維持との爲めに遂行することを餘儀なくせらるゝものは、即ち階級闘争の形式に於ける戦争である。

スペンサーは曰ふ、社會相互間に於ける此の戦争は、將來に於いては必ずしもそれが過去に然りしが如く重要な役割を演じないであらう。人類の掠奪時代に在りて、戦争は教育的の效果を有した。共同的防禦と連帶的攻撃、「一致の力の秘密」は、生存競争を行ひつゝある吾人人間に貴重なる社會的本能を鍛へ附け、此本能を吾人は順應と遺傳とによつて次第に増加醇化せしめたのである。社會的生存競争若くは戦争が無かつたならば、吾人は恐らく今日尙は依然として有史以前の穴居人に非んば濠

洲黒人の如く、常に戦々競々たる自然人の域に止まつたであらう。戦争的典型は、人類に於いて教育的に避くべからざる過渡階段である。何となれば獨り戦争によつてのみ、多くの大國民は組織立てられ、嚴格なる訓練を受けて、吾々、一個の統一的なる全體に融合したからである。之と共に性格形成の上に強制と壓抑との加はるは事實である。軍事的典型は人間を平等化し、劃一化し、機械化する。併し乍ら戦争の鐵の如き訓練は、人類が社會的なる或種の性格特質を遺憾無く發展せしむるには必要無く可からざるものであつた。「野獸の如き人間」は、唯だ戦争的典型によつてのみ、馴らさるゝことを得た。併し乍ら之と同時に、冷酷、粗野、殘忍なる特徴が、戦争的典型によつて人間性情の上に刻印せられた。而して現今の如く、仲裁々判的決定が王權的戦争若くは王位繼承戦争の地位に代はるべく定められて居る産業制度の時代に至りては、曩に戦争的典型が人間性情に植ゑ附けた此等の特徴を漸次再び除去するの機運が到來しつゝある。

今や吾人が次第に其の域に到達しつゝある産業的典型に在りて、適當なる戦闘手段は最早民族間の戦争ではなくて仲裁々判であり、決闘に於ける神の裁きに非ずして契約による和解である。此處では戦争はまた全然新しき形式を採り、商戦といひ競争といひ、不當利得と稱し壓迫と名づけられる。國民的若くは政治的戦争に代ふるに經濟的戦争を以てする。一言にして蔽へば相戦ふものは國民又は民族に非ず、産業體系に於いて敵視するものは、主として階級、同業者、利益團體である。

個人主義者ハーバート・スペンサーは、生活條件改善の目的を以てする社會的階級闘争の社會學的是認に對して、固より不賛成なるべき道理は無い。彼は勞働階級の狀態改善を庶幾する一切の手段、即ち階級闘争、ストライキ、賃銀運動等をも原則として是認せざるを得なかつた程、正義心は彼に在つて第二の天性となつて居た。スペンサーも亦凡ての生物の共通の究極目的は自己保存に在りとする以上(社會學第四百四十四節)、社會的機關の各個が、自己をその特性に於いて主張することに努力を傾注するは當然である。随つて、若し、賃銀勞働者が、階級意識と階級利益と組織的階級闘争によつて自己保存及び社會的平衡の主張なる目的を達成するに便利なるの故を以て、階級利益に於いて一致團結するとしたならば、スペンサーの社會學はそれ自身の論理的結果により、此の階級闘争の社會學的的存在權利を否認することは、到底不可能なるべき筈である。

併し乍らスペンサーが社會學的「禁物」として畏るゝものは、實に共產主義である。彼に取つて産業的典型が各個人に保障するところの自由は、何物にも換へ難き至寶であり、随つて平等といひ友愛といふも、到底之と比肩し得るものでは無い。彼は共產主義を以て、其主義者等が破壊せんと欲してゐる、中世的封建制度の一新形式に過ぎずと爲して居る(社會學第四百四十四節)。彼に取つてあらゆる種類の專權主義は悉く衷心より憎むべきものである。恰も彼れは當年既に今日のボルシェヴィキを逆踏したるかの如くに、下よりの專制を排撃すること、毫も上よりの專制と擇ぶところが無い。「民衆」と

いふ主權者も、凡ての有形の君主と同様に、専恣と支配慾と壓制心と儀刑制馭の望とを有する。スペンサーは曰ふ(社會學第五百六十二節)「如何となれば、凡ての共產主義は、軍事的典型に固有なる強制的協力といふ原則を基礎とするが故である。善良なる者と不良なる者、懶惰なる者と勤勉なる者、悉く國家の巨腕によつて平準化せられる。而かも是れ實に、産業的國家に於ける生活に最も良く適合するところの個人を訓練養成するを旨とする産業的典型的の教育事業と、相容れざるの甚しきものである。然るに共產主義に在りては、嘗て戰爭的典型に在りて之を見たるが如き少數者の多數者に對する直接的掠奪がその跡を絶つ代りに、多數者の少數者に對する間接的掠奪が現はるのである。

いふまでも無く、スペンサーは現代の社會的傾向を看過しなかつた。産業的典型が愛他的感情を吾人に養成したるが故に、吾人は日を逐うて益々博愛的人道的になつた。是れ勞働階級の利益を旨とする吾人の福利施設が遺憾なく證明したところである。併し乍ら萬人平等の原則に基きて築かるべき共產主義的國家を庶幾するが爲めに、之と反對に萬人自由の公式を根拠とする個人主義的國家——スペンサーは此思想に於いて、全然イマヌエル・カントと共鳴して居る。(スペンサー著「正義」附録第一、「カントの權利觀」參照)——を變形することは、スペンサーよりすれば歴史の倒施逆行である。彼れの傳記者なる獨逸人オットー・ガウプに宛てた一書簡中(同傳一四六頁)、スペンサーは「社會の永續的改良は個人の改良を俟たずんば到底不可能なり。蓋し社會の體型は、必然的にその單位の性格によつて左

右せらるゝを以てなり。劣惡なる人間を以てしては、如何に特殊なる社會的施設を以てするも、竟に優良なる社會を造り出だすに難きこと、猶ほ劣惡なる建築材料を以てしては、如何に特殊なる建築方法によるも到底善美なる家室を作り難きが如し。余は信ず——スペンサーはこの注目すべき書簡を結んで曰ふ——社會主義は避く可からず、而かもそれは世界が經驗したる最大不祥となるべく、而して畢竟最も峻苛なる形式の軍隊的專制主義に歸着すべし」云々。

勞働階級の福利に資するところある一切の事は、スペンサーは滿幅の是認をする。勞働者の障礙を除去することを目的とする凡ての社會的方策に對して、スペンサーは彼れの政治的經歷の冒頭より、常に熱心に之を辯護した。但しこの如き勞働者優遇も、唯だ一個の制限のみは之を認容しなければならぬ。それは「勞働階級に對するあらゆる不正の除去は、それが驅逐したるものより一層大なる不正を伴ふこと莫きを要す」といふ一事である。

今日社會主義と自由主義との間には政争の波瀾が逆捲いて居る。階級闘争を宣道することは兩者を一にする。唯だ後者は、單に之を以て政治的教育手段となすに止まるに反し、前者は之を以て自己目的と爲すの差あるのみ。スペンサーに取つて、階級闘争は社會教育的戰術の副次的問題であり、カール・マルクスに取つてそれは決定的原則である。前者の觀るところを以てすれば、階級闘争は單に生存競争の一特殊例即ち過渡の一階段、永劫の自然律に従ひて發展する社會的進化の一契機に過ぎない。

之に反してマルクスよりすれば、階級闘争は實に歴史の永續因子、即ちスペンサーに於けるが如き社會的進化の單なる偶發事に非ずして、歴史の本質とまでは謂はざるも、少くともその中心的範疇たることを失はざるものである。スペンサーが唯名論の英國古來の傳統を繼承持續する間に、マルクスに於いてはヘーゲル一流の概念實在論が依然として影響を留めて居る。之を要するに、社會主義者と自由主義者との間に於ける階級闘争理論の争は、「第一の基礎となるものは何であるか、個人か或は種か抑も、歴史の明白なる意義は何ぞや、それは個人主義者スペンサーの認むるが如く個性であるか、將た又社會主義者マルクスの主張するが如く集合體であるか」といふ、千古に亘つて決せざる普遍的疑問の、近代社會學的一反映に外ならない。

個體と種との此の永遠の對立に逢着して吾人は息苦しき懊惱を感ずる。聖書にあるカインとアベルの神話は人間胸臆それ自身の中なる兄弟殺しの葛藤に於いて社會學的對比を有する。個性としての吾人は自由に向つて、種の一員としての吾人は平等に向つて、渴望の喘ぎを續ける。頭腦を以てしては個人主義者たる吾人も、心胸を以てしては社會主義者に豹變する。各人は一個の個體と種の一員とに分裂する。吾人の個性の中心、自我は、種への没入に對して徹頭徹尾反抗を敢てする。種の一員としての吾人は、之に反して不可抗的に他人に牽きつけらるゝことを感ずる。理智を以てすれば個人主義者、情緒を以てすれば社會主義者である。社會的論理は、スペンサーと共に吾人に命ずるに「自由」を

以てし、社會的倫理はマルクスと共に「平等」を以てする。現在の社會學的ディレムマは余が「存在の意義」(一九〇四年著)四二〇頁に於いて論じたるが如く「自由——平等」と呼ばれる。斯くの如くにして吾々人類は自己胸裏の幾多の扞格矛盾の間に——個性と種と、自己主張と種の保存と、個人主義と社會主義と、自由と平等と——永久に右往左往する。人類に於ける此の永久なる振子運動を吾人は歴史と名づける。抑も吾人は今や自由と平等との二つの挽臼の間に粉碎せられんとするのであらうか。

現代に於けるこの最も普遍的なる社會學的頭腦の卓絶せる思想的功績に對して吾人が抱く深き尊敬は、固よりかの世上紛々たる形而上學的小工匠と社會學的襁褓兒とが、おほけなくも往々此の精神的巨人に對して擧ぐる嘲笑的語調に墮することを防止すると同時に、一方に於いては、羅針盤のあらゆる方角に向つてスペンサー末派の紋切型に習熟した合唱が、縦横無盡に放送する頌歌に雷同附和するの誤に陥ること莫からしむるであらう。何となれば、有機體の世界と社會的世界との比較に於いて、單に類推を試みるのみならず、屢々此類推を平行性にまで引き揚げ、更に甚しきは動もすれば之を同一性にまで趨らしむるところの方法、此點のみに對しても吾人は切實なる疑義を抱かなければならない。吾人はかの「有機的」方法——「有機的國家論」の一遺響——に對して「比較的——歴史的方法」を提唱する方法論的偏頗の危險が宗師に於けるよりも末流の徒に在りて一層明瞭に現はるゝを常とするは、殷鑑近く有機的國家論に於けるフォン・サヴィニーと其徒弟とに在るが如くである。斯くて、類推結論の濫用

と過重に累せらるゝこと、シエフレに於いてその適例を示し、更に、リウエンフェルトに至つては、此の病的なる類推癖は、竟に社會學的遊技に墮落し、往々にして作爲と遊戯との域に沈淪して居る。

スペンサーの心理學が、綜合的哲學に於いて他と懸絶して最も薄弱なる部分と認めらるゝことは、決して偶然では無い。自然民族の人類學への過度の没入は、文明民族の心理に對する彼れの聰明を蔽却した。「より善く組織せられたる社會を形成するところの人間は、最初に於いて、他よりも強く、他よりも巧黠なる獸人であり、而して永く斯くの如き状態を持續したものに外ならない」と斷言するスペンサーは、文明民族の理智の進化と、進歩せる國民に於ける社會的感情の進化とに對して、適當なる考量を加ふることを怠つて居る。而して、獸人及び蠻人が壓倒的優勢を示す間に在りて、尙ほ且つ例へば錫蘭嶋のヴェツダ族の如く、若干の社會的本能に於いては寧ろ文明人を凌駕する穩和なる種族を見るといふ事實に逢着するや、スペンサーは窮餘の血路として、之を以て本則を立證する僅少なる除外例と爲さず、却つて之を一般化して、社會性は必しも悉く進化の産物に非ずとするが如き偏頗なる妄斷を敢てするの錯誤に陥つたのである。斯くの如くにして進化論者の典型スペンサー其人——萬象を物質の合一及び之と同時に進行はるゝ運動の分散とに遡源せしめんことを欲する——が、卒然として人間感情の進化の段に至つて躊躇と行き詰る限り、彼は思想の不一貫の手痛き復讐を受けて居る。吾人の觀るところを以てすれば、社會學は將來此點に基礎を置いて建設せられなければならない。今日、

文化人の間に逐日増加する連帶性（言語、宗教、傳統、同業組合、社會的團體、株式會社、相互主義の原則を根柢とする保險事業の各般の種類等）に於いて無數に發見しつゝある人間性情の社會性は、吾人の有機組織の爾餘一切の機能と同様に、有機的に吾人に根ざして生長する進化する産物として證明せられなければならない。曩にアルフレド・ビーゼが、自然感情に關して歴史的に指示したところは、將來、比較的歴史的方法の手段により、凡ての他の道德化的並に社會化的感情（友誼、愛、同情、犠牲能力等）に對しても證明せられなければならない。即ち若し此等の感情が比較的高度に發展進化したる社會的有機體に於ける必然的進化産物たるものが立證せらるゝならば、その時初めて彼等は科學的に妥當性ある至上命令となり得る。凡ての此等の愛他的感情が、必然的に自己を形作る機能として科學的に説明せらるゝと共に、此等の感情の事實性より流出する。社會的至上命令は強制力を獲得する。神學的至上命令には終始依然として歎願的なる「あれかし」が伏在する、倫理的至上命令には無造作に容認し難き「筈なり」が潜む、科學的社會的至上命令に至つて、初めて儼然たる「せざるを得ず」を含む。

スペンサーが竟に吾人の要求するが如き社會的至上命令を設立するの功を成すこと能はざりしことは、彼が人類の「産業的典型」の過重に於いて偏頗なると同様に、その「戰爭的典型」の過重に偏頗であつたことからも亦明かである。蓋しスペンサーも亦勿論之を確認したる社會的進歩——社會状態への

適應——は畢竟「自由」なる個人が、その中に在りて初めて彼れの十分なる權利に到達するとせられるところの、産業的典型の有頂天なる頌揚といふことに歸着する。若し此典型が、眞に人類に於ける既往の文化發展の最終の名であり、最高の意義である筈とするならば、吾人は謹んで名譽の冠を、シヨールペンハウエル（一七八八—一八六〇）に捧げ、而して社會的厭世主義が、樂天主義に對する古來の訴訟の終審に於いて、決定的に勝利を占めたことを率直に白狀しなければならぬ。如何となればスペンサーが、其著「人對國家」に於いて説くかの極端なる經濟的個人主義は、最も嚴苛峻烈なる厭世觀を是認するものなるが故である。斯くの如くにして露骨なる個人主義者スペンサーは、「人對國家」に於いて、一の個人が他の個人の子孫の教育に對して責任ありとする公共的教育を、不條理なりと斷定するが如き頗る反社會的主張にまで趨つて居る。彼より觀れば、社會の原理は出来る限り強制を減少することであり、國家の原理は、出来る限り強制を増大することである。是れ彼が、偏に強制を目的とする設備なりと目する國家のあらゆる干渉に對して、神經質なる恐怖を懷く所以である。此の強制設備に對する畏怖は、彼を驅つて盲目的に社會哲學的無政府主義の懷に趨らしめて居る。過去に對する擾々たる穿鑿は、彼をして現在の鞅々たる脈搏の音を聴き洩らさしめる。彼は、その當時の技術と産業體系とに適應する表現であるところの彼れの社會學が、既に最期に臨みつゝあることに氣付かない。現在に於ける凡ての社會學的徵候は、所謂産業的典型が、單に「社會的典型」の露拂たるべき過

渡階段に過ぎざることを明示して、また一點の疑義を挾むを許さない。若し凡ての徵表が必しも欺くものにあらずとするならば、今日既にスペンサーの非常強制國家から、將來の新國家が蟬脱しかつて居ると斷言し得るのである。

その著「倫理學」に於いてスペンサーの眼前に漠然と髣髴しつゝあるかの「第三」型の人間は、決して一個倫理的理想の縹緲たる彼方に隔離せらるゝものではない、寧ろ吾人の社會的感情の進化の自然法則的產物として、大戰後に於ける倫理的社會的運動の中に手に取るが如く明かに現はれて居る。露國共產主義の失敗すら、「新しき國家」は近づけりとの吾人の信念を確かめる。

十五、獨逸古典哲學者と社會問題

獨逸哲學の古典的巨匠（カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、シュライエルマツヘル、ヘルバルト、シヨールペンハウエル）は、新時代に於ける社會哲學の歴史の略述に於いて、單に比較的狭小なる紙幅を要求し得るに過ぎない。フィヒテ及びヘーゲルを除けば、彼等に取つて重大なる問題は「社會」に非ずして専ら法律及國家である。「謂ふまでも無く往々（特にカントの亞流の間にありては頗る最近時に至るまでも尙ほ）「社會」の名を眞額に振り翳すところの論著がないではない。而かも彼等の所謂「社會」は、全然別個の意味に解せられて居る」（註三三）。此の哲學的古典主義の共通點は——かの法律及

道徳を本源的の趣味批判に遡及せしめたるヘルバルトを唯一の除外として——法律及國家を、理性の命令に還元せしむることである。即ち感情哲學者に隨へば、法律、道徳並に國家に於ける一切の社會的生命は感情(同情)に於いて、又功利主義者に隨へば、自己保存衝動並に之より生ずる利害關係に於いて、その究極の基礎を有するならば、所謂、古典主義者に隨へば、それは理性命令に存する。カントの所謂「至上命令」即ち實踐的理性の一命令は、獨逸哲學の全線に於いて勝を制し、唯だ同情を特説偏重する點に於いて歎を感情道徳に通ずることを意味するシヨールペンハウエルを例外とするのみである。理性命令の古典的代表者カント、フィヒテ及びヘーゲルが、國家及び法律哲學の戰場に於いて祝賀したる思想的勝利は、既に思想上彼等と相通する筆によつて叙述せられた。特にカントの哲學は「社會問題」に裨益した。人間は専ら目的として使用せらるべきものにして、決して單なる手段として使用せらるべからずとするカントの嚴正なる主張は、「かの奴隷てふ機械を以て、神意に基く世界秩序、若くは當時之と同意義を有したる自然、と合致し得るものと考へた低劣なるアリストテレス一流の貴族主義」(註三四)の面上に痛打を加へたものであること勿論である。端をカントに發し、特にフィヒテを根本の力を以て把握したる義務概念は、獨逸に於ける一種の倫理的社會主義の爲めに道路を平坦にした。カント精通者の白眉の一たるヘルマン・コーエン(一八四二—一九一八)が「カントは獨逸社會主義の眞實の元祖である」といふ勇敢なる斷言をなして憚らざるところを見れば、社會主義に對するカン

トの思想の影響は蓋し、想半に過ぐるものがある(註三五)。カントの道徳的眞摯性とフィヒテの雄辯家的熱情とは、獨逸民族をして、各人が人格なること、換言すれば、各人は法學の意味に於ける一個の「物件」に非ず、將た又經濟學の意味に於ける一個の「商品」たることを許さざることを、潑刺と意識せしめた。カントの根本原理、即ち何人をも——勞働者と雖も——單なる手段としてとはなしに、必ず同時に目的として使用すべしと謂ふことを一般化し、且つ一個の社會的法律に於いて現實化する時、吾人は毫も一切の革命を須むずして、漸次に社會的國家に推移すべき最善の途に就くのである。

單に一個の契約の所産たるのみならず、究極に於いて、一個の理性觀念の流出であるところの國家は、カントに取つて、第一に一群の人間の法律下に於ける結合に外ならないことは確實である。併し乍ら公共的(社會的)正義は、彼より觀て人間の種族理性の最深なる表現である(註三六)。正義にして滅びんか、人類が此世に生存することは復た何等の價値を有しない。斯の如く凡ての個人を吸收併呑するカントの抽象的形式に對しては、是れより先き既にヘルダーがその「歴史哲學論」神「特に「純粹理性批判の批判」に於いて一矢を酬い、個性を防衛し、その自然的權利を擁護した。斯ういふ反對説はあるが併し凡ての個人を超越して凡ての個性を包容し、彼等の最も強き利益を含蓄し、絶對的妥當性を要求するところの最高形式を建設したることは、依然としてカントの態度に於ける蔽ふべからざる長所たることを失はない。

至上命令の倫理の代辯者中最も雄辯なる者は、蓋しフイヒテ其人を以て白眉とする。彼れの道德的規範、即ち獨立的に生育し、自主的に行爲し、汝を自由にし、驀地に汝の義務に關する汝の信念に隨つて動作せよ——之を他の言葉にて現はせば、常に汝の天職を遂行せよといふことは、フイヒテがその「獨逸國民に寄するの辭」現代の特徴「學者の天職と本質とに關する講演」等の著書に於いてこれを通俗的に説くことによつて、彼れの「社會主義的」著述たる「封鎖せる商業國」よりも遙に多く獨逸國民を社會化した。吾人は曩に本書第十六章に於いて、此最後に擧げたる著書——一種の公然たる國家社會主義的宣言——の内容を分析し、且つ之に添ふるに若干の批判的註釋を以てした。其際吾人はあらゆる經濟的自由に對する彼れの横暴なる壓抑に對して忌憚無き批難を試みたが、之に反して今此の場所に於いては、市民的自由に關する彼れの深刻にして精緻なる分析に對して、熱心なる賛成を表すことが出来る。「全世界をば吾人の理性的理想に隨つて形作らんと欲するフイヒテの要求は、個性及びその自由領域の細心なる保全と結び付けられて居る」といふイョーヅルの言(註二七)は、獨り「道德學體系」(一七九八)に關してのみ適用せられ、「商業國」に就いては當て嵌まらない。且つフイヒテが、個人の自由に關する思辨的理路に於いて歎賞すべきものを示し又一個の民族個體(Volksindividuum)としての國民性の觀念の創造に於いて不朽の功績を擧げたることは、固より之を拒むことを得ないが、而かも、「自我」の古典的代表者兼普遍化者フイヒテが、「商業國」に於いて其進路を指示したる經濟的個

體に關しては、竟に一個の紛れも無き反個人主義者たるの事實は、到底之によつて抹殺し去ることが出来ない。唯だ、勞働の道德的價値に對する重視てふ點に於いてのみ、フイヒテの姿は偉大にして歎賞すべきものである。彼に取りて世界其自身が畢竟「義務が感覺によつて認識さるゝ物質となつたもの」に外ならずとすれば、義務そのものは結局勞働——且つ自己目的としての勞働——以外の何物でもない。單に後に至つて休養享樂せんが爲めに勞働する者は、非道德的(他律的)に行爲するものである。如何となれば、怠惰は實に根本惡なるが故である。斯くの如く、勞働を道德的理想として、之を元質視することは、從來ブルードン及デューリングの兩者によつて再び左袒せられたるところであるが、吾人は茲にフイヒテの社會主義的思想核心を見るのである。「所有權とは行爲に對する排他的權利の謂にして、物に對する權利の意に非ず」とは、「商業國」に於いて道破せらるゝところである。

凡そ、反個人主義的特徴の最も明確に刻印せらるゝこと、ヘーゲルの社會哲學に於けるが如きは他に比倫を見ざる所である。是より先き既にフイヒテは國家の目的を個人の幸福の促進に存せずして種族——先づ自己の民族最後に全人類——の利益の増進に在りとなした。「自己を保存せんとする國家の目的と、人類が自己の自由意志によつて、自己を理性の巧妙なる模像となすことを得べき外部的條件の中に人類を置かんと欲する自然の目的とは、相合致するものなり」とは、フイヒテの明言するところである。獨りシュライエルマツヘルは、人類の自由の源泉は理性にありとするフイヒテの出發點に賛同

しつゝ、然かも同時に個性の權利を強烈に主張するの勇氣を有つた。之に反してヘーゲルにありては國家が直ちに道徳性の本體に凝成する程、しかく個體は國家の影中に没入する。ヘーゲルも亦アリストテレスと共に、個々の人格は一個の國家の中に在りて始めて克く自己を完成し、道徳的に生命を全うし得るといふ社會的事實を力説する。成程彼れの法律體系(法律哲學の基線)にありて自由の演ずる役割も、決して輕小では無く、思辯的倫理の命令たる「人格たれ」は、ヘーゲルが「實現せられたる自由」の王國を認めたる彼自身の法律體系の、核心點をなすものである。併し乍ら個性の自由はフィヒテにありて、經濟の機構に於いてその限界を有したるが如く、ヘーゲルにありては、國家の有機體に於いて之を有した。國家は、客觀化したる種族理性として本質であるに反し、個體は單に國家の埒内に在つて、偶有性たるに過ぎない。國家は絶對的なる自己目的にして、個體は單なる手段である。如何にも、「幾多の民族は、彼等が國家形成といふ天職の遂行に到達するまでに、國家を有せずして長き生命を持続したるものなるべし」(註二八)、併し乍ら一旦形作られたる國家は、歴史的生命の中に示現する永劫なる神慮として現はれ、自ら人格となり、之と相並んではこの國家を組成する一切の個人は——唯だ、自己の中に生命を享け來る種族理性を體現するところの一個性、即ち君主を除いて——悉く完全に影を潜むるものである。曩にレッシングがその「共濟組合員の對話」中なる「エルンストとファルク」の一篇に於いて、本體を明快に描寫したる、「市民的社會」の意義の如きは、ヘーゲルにありてこれを

國家の中心的意義と比較する時、卒然として準備的階段に低落し去るのである。但しヘーゲルが「市民的社會」といふもの——シエリング流の「絶對」の代表者より觀れば「極微量」考慮を要せざる物」に過ぎざる——に對して、兎にも角にも若干の考量を費したることは、たしかに社會哲學史上彼に顯著なる地位を保障するものであること、恰も「歴史哲學」に於ける彼れの卓絶なる企圖が、假令最後のヘーゲル派若くは新ヘーゲル派の名は、單に文學史といふ凡ての思想の納骨堂に收められるゝに過ぎざる場合に至つても、尙ほ且つ人類思想の歴史に於ける千古不滅の標石たることを失はないが如くである。併し乍ら憾むらくは、ヘーゲルは市民的社會の概念を、世人が當然此の定義の巨匠に期待したるべしと思はるゝ程、しかく明確に輪廓附け、精密に表現することも無く、又市民的社會の埒内に於ける個人に對しては謂ふも更なり、社會そのものに對しても何等の深き意義を與ふることも莫かつた。此等のものは、單に國家の一要素(その中止揚せられたる)を形作るに過ぎないとせられた。數滴の社會的膏油を以て塗られたる、少くとも勞働問題に對して十分なる理解を有したる當時の唯一の思辯哲學者はフランス・バードであった。ハンス・ライヘルが、遺憾無く證明したるが如く(註二九)、バードこそ、「最も早く國家的なる勞働者保護政策の必要を識認し、且つ熱烈に之を力説したるもの、一人、否恐らくは眞に最初の人であつた。」

十六、無政府主義者

「獨逸の古典哲學が辿りたるこの傾向——恐るべき吸血鬼「國家」の個性併呑——に對する反動は、遂に發現せずして止むことを得なかつた。當年ヘルダーがカントに對し、シュライエルマッヘルがフィヒテに對したるが如く、今やブルードンはヘーゲルに對して、個性を救はんと試みた。ブルードンがその法律哲學的理論を開陳したものは、「革命及教會に於ける正義に就いて」(一八五八—一八五九)の著である。茲に是非とも挿入して置かなければならないと信せらるゝことは、かの進化の思想を、初めてひた押し(の)の理路と辯證的精緻とを以て人類歴史の全般に亘つて驀地に適用したるヘーゲルの歴史哲學は、其の究極するところ、(ゲルマン人の)世襲君主の禮讚に歸着する故意の忠誠を以て充滿するに拘はらず、尙ほ且つ無限の革命的萌芽を包藏するものであつたといふ觀察即ち是れである。如何となればヘーゲル哲學の右翼及中央に對峙するものは、獨りブルノー・パウエル、リヒター、ルーゲ、ダーヴィット・フリードリッヒ・シュトラウス及びルートヴィヒ・フォイエルバッハ等の名によつて示さるゝが如き、社會哲學的に見れば空理的自由主義に膠着したる、或は更に甚しきは一種の反社會的保守主義に逆轉したる(例へばシュトラウスの「舊信仰と新信仰」の場合の如く)急進的左翼のみならず、亦かの革命的社會主義がその最も顯著なる人物たるマルクス及びブルードンに於いて、その社會哲學的宗師ヘーゲルに對立することは、ヘーゲルの學說の如何に屈伸自在にして含蓄多岐なるかを證するに餘あるが故である。加之、無政府主義の創始者ブルードン其人に於いてすら、尙ほ且つ獨逸古典的哲學の造詣が彼に刻印したる痕跡を蔽ふことが出来ない。彼は最高なる社會的義務として人間の威嚴を高唱力説するに殆どカントの亞流の面目を髣髴する程の嚴肅さを以てした。彼が將來の社會的國家を建築せんと欲したる基礎は、狂熱的社會主義者の主張するが如き愛に非ずして、常住到處に尊重せらるべき「人間の威嚴」である。彼が根絶すべからざる社會的因子の一として良心を高唱したることは、フィヒテを想起せしむる。彼が人類に於ける道德的進歩を熱烈に力説し、之を否定することを以て一種の褻瀆と名づけたることは、彼が絶対正義の理想の實現を以て進化の最高意義と爲したること、相俟ちて、彼のヘーゲルの徒たることを明示する。

然るにも拘はらず、法律感情の禮讚者であり、法律を以て人類性情に於ける社交性よりも一層尊重すべきものとすら看做したるブルードン其人が近代無政府主義の父となつたことは、人類思想の歴史に於いて枚擧に違あらざるかの氣紛れの一たることを失はない。更に後の爆彈投下者等が、稍々神經過敏の嫌ありとは謂へ頗る多感なるブルードンに於いて彼等の父を、又若し彼等が化學の實驗室に於けるが如く哲學史的系譜にも精通するならば、ヘーゲルに於いて彼等の祖父を、尊敬しなければならぬことに至つては、蓋し精神史上に於ける好個の喜劇であつて、獨りオリムポスの神にのみその全

幅の諧謔的内容を鑑賞し、所謂「ホメロスの笑」(ホメロスの叙述中にあるが如きいつまでも果てざる哄笑の聲——譯者)を以て喝采することを得べきものである。

ブルードンの無政府主義より、此主義の個人主義的、並に共產主義的系統が分岐する。マックス・シュティルナー(一八〇六—一八五六、本名はカスパー・シュミット)——大體としてはブルードンと無關係である——を首脳とする個人主義的系統は(註三〇) 社會的個體を原子化する。シュティルナーの無政府主義者信条は、「唯我獨尊」であつて、是れ實に凡そ國家と名づけらるゝ一切のものに對する官戰であり——シュティルナーに隨へば、國家は勞働の奴隸制を基礎とするものに外ならない——躁狂症に墮したる「自我狂」を意味する。個人主義的無政府主義は、嘗てフィヒテ及びヘーゲルの巨腕を以てして尙ほ且つ征服すること能はざりし人間中心主義的世界觀への病的なる逆轉である。唯このシュティルナーに取りて、社會的全體の中心點は當年の「種族理性」の思辯的代表者等に取りて然りしが如き「類」人ではなしに、「個」人である。この個人主義的無政府主義は、政治界に於けるよりも藝術界に於いて、より多くの共鳴を見出した。その首唱者は、ツッカー(一七〇五—七四)(註三一)、マッケ(註三二)、及び——多少の異趣に於いて——詩人イブセン(一八二八—一九〇六)である。「國家なく、且つ賃銀制度なく、個人の考へ得べき最大なる自主權を有する社會秩序」を理想とする如上の個人主義的無政府主義の民主的系統より、流行哲學者フリートリッヒ・ニーチェを盟主とする貴族主義的系統が分派す

る。ニーチェも亦彼れの「超人」の無政府的無拘束を夢想する。併し乍らこの「超人」に取りて、無政府状態は一個の特權である。彼にありて文化進展の意味と目的とは、凡ての人の無拘束なる自由には非ずして若干人の無政府的隨意である。彼は憚るところ無く公言する、「勞働問題の愚は……勞働問題の存在其自身の中にある。確實なるもの——本能の第一至上命令——は問題とならない」ニーチェは歐羅巴の勞働者から最早「典型支那人」を生せざることを憾とする。「人、何事をか欲する。目的を欲せん乎、亦、手段を欲せざるべからず、即ち若し奴隸を欲し、而かも之を教養して主人となさば、之をなす者は痴なり」更に、「無政府主義者の狗のあからさまなる露齒」と、自ら社會主義と號して所謂「自由なる社會」を庶幾する「愚劣なる似而非哲學者と、及び同胞愛狂人」とに對する彼れの態度の表明に至つては、一層痛烈である(「善惡の彼岸」一二五頁)。

その全力を、獨り道徳上の奴隸解放運動のみならず、亦直ちに實際の奴隸解放運動の爲めに傾倒し之と同時にニーチェの眼前に理想として髣髴したるところと兩極的反對の地位にあるものを庶幾する同胞愛狂人等は、言辭に恍惚するの餘り、彼等の最も根本的なる對蹠者を歡呼の中に旗手として先頭に押し立つる程、甚しき「概念の渾沌」を敢てして居る。その最も溫和化せられたる形式に於いてすら共產主義的色彩を帯び、如何なる場合にも必ず民主的なる社會主義と、ニーチェの貴族主義的「無政府主義的なる個人主義」とほど、截然として相容れざる對照立をなすものは、事實社會學上他に比倫を見

ない。然るに、論理的標題義務に欺かれ、自己の笑聲を神聖なりと稱し、「笑ふ者の薔薇の花輪の冠」を自己の頭上加ふる(註三三)選ばれたる超人が、彼自身を、却つて其の蔑侮して已まざる「無政府主義者の狗」の班に加ふるの已むを得ざるに至つたことは、此の貴族的無政府主義の巨人に取つて、確かに致命傷たることを失はない。如何となれば、凡そ共產主義的無政府主義なりや或は貴族的無政府主義なりやは全然詮議立ての必要がない、何となれば論理的範疇は、兩者を無容赦に一個の「無政府主義」といふ同一列に押し込んでしまふが故である。「基督教的」を以て目すべきトルストイの無政府主義と雖も吾人の観るところを以てすれば、尙ほ且つ依然としてニーチェの貴族的無政府主義と同様なる個人主義的無政府主義の特殊なる傍系に過ぎない。兩者に共通なるものは、凡ての無政府主義的個人主義に特有なるその反社會的特徴である。

斯くの如き人類の社會的原子化が、竟に吾人の社會的生活の嚴苛なる現實の裡に永續して自己を主張貫徹すること能はずして、僅に若干の空想家の腦裡に束の間の存在を保つに過ぎなかつたことは、無政府主義の歴史的運命其自身が紛れもなく之を示した。曾て滑稽にも「自我主義者聯盟」を主張したるシュティルナー一流の孤立的(利己的)個人主義と相反する、バクーニン(一八一六—一八七四)クロボトキン(一八四二—一九二〇)及びレクリュー(一八三〇—一九〇五)諸家の共產的無政府主義が勝を制した「寂寥を欲する者はやがて孤立する」といつた詩人の言葉は吾人を欺かない。無政府主義の彼の義

勇兵等は、独自の黨派を形成するに足る社會的勢力を有たなかつた。然るにニーチェ一輩の貴族的無政府主義に反して偏に友愛を基礎とするところの共產的無政府主義に至つて、初めて秋霜烈日、鋼鐵の如き社會的論理の手段により、人類社會に取つて重大なる關係を有する黨派にまで結晶することを得たのである。「此等の無政府主義者の要求する社會形式は、その中にある各員が、各自の「自我」、即ち彼れの個人的材幹及び能力、願望及び要求を、完全に發揮達成し得る底のものである。随つて彼等はあらゆる政府を否認し、唯だ自由なる幾多の組合が、共同生産を目的として組織せらるゝことのみを是認する」(註三四)。而してヘーゲルの三韻的旋律が、此の共產的無政府主義にありても如何に深くその血液の中に潜在するかは、「國家主義即ち集中は正なり、無政府主義若くは無結晶は反なり、而して、聯盟は合なるべし」と公言するを常としたる、バクーニンの辯證的對比辯に徴して一目瞭然である。バクーニンの「書簡往來」は、將に成立せんとする無政府主義の思想のよつて來たる所以に對して、深き洞察を吾人に與ふるものである、吾人は此等の書簡よりして「行爲の宣傳」の起生を、その幾多の局面に於いて仔細に看取することが出来る。「人、吾が頭を打つこと一度、再度、將た十度二十度なるも可なり、第二十一度に至つて、若し民衆吾を援け、相率ゐて革命に與みせんか、吾人は犠牲に對して優に償はれん」とバクーニンは喝破して居る。抑も自己の權利を投票を以て獲得せずして、手中の爆彈によりて割取せんことを欲する最も粗暴無羈束なる無政府主義と雖も、その社會的基礎として竟に「連

「帶」を棄却すること能はざるは、頗る注目し値する。試にバクーニン、クロボトキン、レクリュー等を涉獵すれば、安らかに永眠したる感情哲學の社會的樂觀の古き時代へ吾人を遡らしむるに足りる這般の連帶に對する禮讃が、枚擧に違がない。將來に於ける「理想的に自由なる」無政府主義的社會は、大初より人類に内在すと稱せらるゝ連帶の原則の社會基礎の上に立つものである。

十七、ランゲ、デューリング、ハルトマン

今日、吾人は方に一個の形式概念渾沌に直面する。即ち無政府主義的黨派は、一方に社會主義的黨派が之と對立する限り、一個の黨派としては全然無力である。之に反して一種の「思想の無政府主義」は、現に鎖を脱した。獨り社會的組織のみならず、亦實に文明世界の全般に亘つて、その致養ある人士の概念の世界に於いても、あらゆる接ぎ目に軋る音が高い。諸種の概念には論理的規律が缺けて居り、社會的有機體には調和する至上命令が缺けて居る。形式論理は殆んど忘れられたるが如く、而して社會的論理は方に埒を脱して居る。社會的事實の深き知識と訓練せられたる思惟とに於いて等しく缺如せるディレッタント的漫談が、直接には書籍市場を、間接には所謂「輿論」を支配する。斯かる時、吾人は論理的痛棒を揮つて、葛地にこの混亂を極むる思想の無政府状態の眞唯中に躍り込み、當年フッテ（第十六世紀の人文主義者にしてルターと呼應して法王に反抗す——譯者）の救世の意氣を以て、社

會的「非開明主義者手簡」(第十六世紀の初、洗禮を受けたる猶太人ブッフアールンが皇帝に進言して、聖書以外のヘブライ書を悉く焚却せんとし、ケルン大學のスコラ哲學者等之に賛したるに對し、エルフルトの人文主義者ルビアース本書を著はして諷刺す。後フッテン之を續稿す——譯者)を編述するの勇氣を有たなければならぬ。若し、社會哲學的思想の歴史や、世界大戰や、世界革命等が、何物かを吾人に教ふるところがあつたとするならば、かの最終の眞理は、獨り朗らかなる論理的思考の平靜なる客觀性の中に之を見出だし得べく、決して渾沌たる黨派的活動の迷亂狂奔の間に之を求め得るものに非ずといふ、明珠の如く赫々たる事實は、確かにその一である。現今支配する思想的無政府状態は、斯くして始めて目下互に仇敵視する社會學的反目に對し、嚴正に論理的檢討を施すことによつて之を除去することが出来る。論理的並に社會的粗暴化の病勢は現今見るが如き概念の荒味曠空の下に在りて、既に甚しく昂進し、獨逸哲學者ランゲ(一八二八—一八七五)デューリング(一八三三—一九〇一)乃至ハルトマン(一八四二—一九〇六)諸家の薦むるが如き薄弱なる藥餌を以てしては、到底之を救ふこと能はざる状態に至つて居るのである。

先にランゲが其著「労働問題」(註三五)に於いて詳述したる社會的要求は、爾來着々として其大部分の實現を見た。而かも所謂「社會問題」に至つては、未だ著しく解決に近づいたと稱することが出来ない。即ち、ランゲは、(一)労働者問題の承認、(二)労働者の眞正完全なる解放、(三)労働者の物質的向上

をその理知的並に道德的向上と分離すべからざること、(四)労働者問題は常に一般的社會問題と關聯して解釋せらるべきこと、(五)労働運動に對して出來得る限り自由を保障すること等を要求する。而して此等要求の重要な部分が、漸次現實の境に漕ぎ着きたることは、社會運動の識者に取りて殆ど言を費すの要を見ざる明白なる事實である。更に其著「哲學教程」に於いて、「群居的」状態を論じて居る「現實哲學者」オイゲン・デューリングも亦、社會學的には到底正鵠に中つて居ると稱し難い。彼れは人間性の一層明確なる鑄刻の要求より出發する。彼に取つてルソーは單に一個の社會哲學者であるのみならず、實に唯一無二の社會哲學者である。彼れの共產主義的道德哲學は、あらゆる「尊長」(Hormentum)を、根本的に破却せんと欲すること、恰もニーチェが飽くまで之を建設せんと欲するの徹底的なるが如くである。彼に取つて個人は完全に主權者——一個の社會的原子である。彼は現在の權力國家に代ふるに「群居的」國家を以てせんことを主張する。同書第七章は「凡ての綜合活動の社會化」と題し、(三六六—四三六頁)デューリングは、彼一流の「群居的」共同團體の空想圖を強烈なる色彩によつて描き出して居る。彼の夢想する「自由なる社會」にありては、労働がその收獲を目的とせば、それ自身を目的として——フイヒテを想起せよ——個人によつて遂行せらるることにより、社會的機構は克く遊戲的容易さを以て、かの個人對社會の利害の永劫なる扞格、並に萬人に満足を與ふるが如き生産及び消費關係の調整に於ける無限の難問題を解決するであらうとされて居る。是れ蓋し實際生活との凡ての接觸を失ひ

たる蠱惑的未來圖の開展に過ぎない。人間の性情を回避せんと欲する者、況や之を全然變造せんと欲する者は、吾人の觀る處を以てすれば、依然として「ユトピア主義」の桃源の夢に耽溺すること深き者である。坑夫乃至石切りの徒に對して彼等が魅力ある賃銀を顧慮すること無く、専ら「労働それ自身を目的として」労働せんことを期待するが如きは、畢竟超人的なることを翹望するものと謂はなければならぬ。社會の進化は人間の感情の進化と等しく、徐々に一歩々々にのみ行はるゝものである。斯くの如く、デューリングが、社會的ユトピアへの勇氣を有するに對し、一方エドゥアール・フォン・ハルトマンは、それが殆ど特立するが故に頗る注目に値する。「現在の資本主義的生産方法に對する藝地なる賛成」の勇氣を有つ者である。彼にありて社會問題は三個の小問題に分解せられる。即ち(一)現今既に生産せられたる物は、從來よりも一層目的に適するやうに分配せられ得べきか。(二)生産は之を現在の状態以上に發展向上せしむることを得べきか。(三)労働苦は之を現在の程度以下に減少し得べきか、是れである(註二六)。

労働收益の向上(ハルトマン著「社會問題の核心」一七五頁乃至三四四頁)、並に労働苦の減少(同書三七三乃至四四〇頁)によりて、彼は所謂「社會問題」を統御し得べしと信ずる。此の點に於いて、「無意識」哲學者(彼れの代表的著書に「無意識の哲學」がある——譯者)は、彼れの現今の經濟機構に對する幾多の深き洞察と肯綮に中れる社會政策的改造提案とに拘らず、此の明瞭に社會的に感ずる吾人の時代

の力強き羽搏きの音を、故意に聴き洩らさんと欲するかの如き観がある。「吾人は凡べて社會的ならんことを欲する」といふことが、今日の一貫せる社會的誓言である。苟も一度産業主義に推移するや否や、吾人はその政治的イデオロギー、即ち社會主義に對して、敬虔なる願慮を拂はなければならぬのである。

十八、ラツアルス及びシュタインタール

上に述べた如き社會的問題の取扱が、今日一個の特殊なる科學部門たる社會學の本務である。社會學をして特殊なる知識部門としての存在權を保有せしめんとすれば、それはあらゆる社會的科學の綜合的體系たることを示し、且つ之を包括しなければならぬ。それは社會の哲學である。コムト及びヴントに隨へば、一般哲學の任務はあらゆる科學範圍を包攝し、彼等の成果を矛盾無き統一にまで引き揚げ、斯くして終局的に統一化せられたる認識、即ち凡ての存在、思考、乃至當爲に對する最高公式若くは法則を把握するにありといふ。さすれば人間社會の哲學である社會學に取つては、諸種の科學の中、特に人類の複雑なる社會的活動を内容とする一部分を取扱ふことが保留せられて居るといふべきである。若し社會學にして最高極致の功を成さんとするならば、それは人類學、古生物學、比較人種學(Patzolの人類地理)、人口學、國民經濟學、道德統計、一般歴史、民族心理學、比較言語史、比

較法律史、比較風俗史、比較宗教史、比較美術史、比較科學史、並に一般文明史等が個々の學問として成し遂ぐるところのものを、巧に綜合して渾然調和せる關係に置かんことを試むること、恰も哲學が、凡ての人間の知識部門に對して同様なることを企つるが如くなるべきである。

精密科學としての社會學の出發點にして且つ最重要なる基礎は、常に社會的事實であつて、此等の事實を一般化し、之を最高の説明要素にまで引き揚ぐることが、社會學の精進努力すべき目標である。又苟も實證主義を遵奉する世界觀は、當に事實より發して原因に到るべく、決して反對に臆測せらるゝ、若くは無證明に假定せらるゝ、原因より出で、事實に降つて來てはならない。嘗てヘーゲル、最後にシュベングラが、筆太に描き出したるが如き歴史哲學が、科學として果敢なく倒壊したのは、それが一種の要求、一種の組立から出發したこと、特に自然界及び歴史に於ける一種の論理的宿命から出發したことが、唯一の原因である。反對論理に依る論理の自己運動若くは自己發展といふ事實は、ヘーゲルの三和絃的旋律——宇宙調和若くは世界交響樂は、組立、反對組立、及び綜合組立、換言すれば命題、反對命題及綜合の四分三拍子に於いて奏せらるゝとする——に對して、ラツェンホーファーにありては、遺稿「社會學」(一七〇七年)中に、所謂「固有的興味」の世界公式によりて、又シュベングラにありては、謂はゞ世界起生の中心發條を形作り、且つ自然界及び歴史に於ける凡ての啓示形式に必然的に伴ふ所の進化の段階によつて、置き換へられた。この「固有的興味」はラツェンホーファー

の「實證的一元論」の説に随へば、凡そ三個の段階(範疇)に於いて現はれる。即ち物質の領域、個人的意識の領域、及び社會的生活の領域是れである(同書第一九頁)。凡ての適法性は、ラッセンホーファーに随へば、同一原力の流出及び發展階段である。社會的生活も亦決して除外例をなさない。「社會的衝動は、不滅なる發展序列中の一員たる個人に固有のであり、而して意識組織の中に形態學的に確置せらるゝ遺傳的素質を基礎とする」(同書一一頁)。固有の興味は物理的、化學的過程並に生物學的法則を支配すると共に、亦個人的及社會的精神構成をも同様に支配する。斯くの如く、固有の興味による原力の自己實現の三階段を以て、全然同一なる事象となすか、將た又單に類似なる事象となすかは何等の重要を有しない。要するにラッセンホーファーの前提は、固有の興味が、自然界及歴史に於ける凡ての過程に對して恒常的附隨物として不可離的に伴ふこと、恰もヘーゲルの三和絃的旋律が、宇宙原理の自己發展に於ける最初より究極に至る凡ての啓示形式を通じて執拗に伴隨するが如く、若くは、シュベングラが所謂歴史の段階を以て、此の自己發展の現れと爲すが如くである。

かゝる先驗的歴史構成を、吾人は歴史哲學とは呼ぶけれども、社會學とは名づけない。或る與へられたる世界形式——本質、單子、物自體、自我、宇宙原理、乃至「原力」と種々雜多なる稱呼はあるが——よりして歴史上の個々の段階を導くこと、即ち謂はゞ歴史の中に神を求むる——何となれば、唯物論者が自然界の中に神を見出だすことを拒むが故に——爲めには、今更かのコムト以來、頗るおふけ

なき、加ふるに語源的に極めて曖昧なる稱呼「社會學」を名乗つて現はれ出でた新しき科學を必要としなかつたのである(社會學—*Soziologie*—といふ新造語が、羅典語の“*Socius*”—伴侶、友人、同盟者——と希臘語の“*Logos*”—内面的思想を發表する言葉、又は内面的思想若くは道理其自身——との混成語であることに對して言語學者等が妥當でないを論ずることも決して不思議では無い)。凡ての時代の歴史哲學者は、アウグスチン以降ヘーゲル及びロホル(一九〇五年歿、獨逸の神學者、「歴史哲學」の著有名なり——譯者)に至るまで、悉く宇宙の計畫、若くは——教會的に表現すれば——神の指を歴史の中に發見すること以外の何物をもなさなかつたといふことは、曾てロバート・フリンツが、「歴史哲學の歴史」三巻の中に詳述したるが如くである。ラッセンホーファー其人も、今更ヴィーコー或はヘルダー、カント或はシラー、フイヒテ、ヘーゲル乃至シュベングラと、歴史哲學的構造に於いて功名を爭はんとする野心を懷いたものではなからう。凡そこの方面から吾人が採り得べきものは、ラッアルス(一八二四—一九〇三)及びシュタインタール(一八二三—九九)以來の民族心理學者、特に最後にヴントの「民族心理學」が之を悉くして餘蘊が無い。

抑も「民族心理學」の「發見」は、ラッアルスが常に彼の畢生の功業として誇つたところである。伯林の文學史家リヒャルト・エム・マイヤーは、「民族學協會雜誌」(*Zeitschrift des Vereins für Volkskunde*)——此雜誌は先にラッアルスが義兄弟シュタインタールと共に創刊し、二十年間繼續した「民族心理學及

言語學雜誌」(Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft)の後身である——第三號三二〇乃至三二四頁に於いて、ラッファルスに對する追憶を發表したが、其中に此の民族心理學の兩巨星の關係を次の如くに述べて居る。「概して言へば、最初の間兩者の分業は、恰もバイブルに記されたモーゼとアロンとの間に於けるが如くに行はれた。即ちシュタインタールが兄弟の口に言葉を移し、而して後者が、彼に代つて民衆に向つて之を語つたのである」。之に對して忠實にラッファルスに追隨する崇拜者の一群は大に憤慨した。そしてアルフレッド・ライヒトは、彼等の名に於いて一九〇四年ライプツヒヒに發行したる「民族心理學創建者ラッファルス」なる著書中にあるシュタインタールの言「民族心理學創建者たるの名譽は余に屬せずしてラッファルス教授に歸す」といふを根據としたる、詳細なる文書的證據を掲げて居る。

此の自家争は、爾來苦々しきまでに激烈なる形式を採るに至つた。而して——年代的方面より見て——疑もなくラッファルスの方に團扇が上がるべきものである。併し乍ら學問に對しては、抑も所謂民族心理學といふものが一個の科學として可能性ありや否や、特にそれが一個の獨立せる部門として存在權を有すや否やが甚しく疑問となつて居る今日、此論争は殆ど意義を有しない。ヴィルヘルム・ヴント(一八三二—一九二〇)が、言語、神話、風俗、習慣及美術に關する彼れの研究に冠するに「民族心理學」の名を以てしたといふ事實も亦、尙ほ未だマイヤーの言を假りて謂へば、此の學問の「權利に對する

異論」を一掃して之を「確立」するの域を距ること頗る遠い。試に「民族心理學の道途及目標」(一八八八年、「哲學研究」第三卷所載)に關するヴントの論文を見れば、吾人はヴントの指す民族心理學の範圍が、ラッファルスの主張を尺度として計測して頗る狹隘なることを見出すことであらう。其他に於いても余の主宰する「哲學及哲學史ベルン論叢」一九〇〇年第十七卷に現はれた、「歴史哲學、民族心理學及び社會學」といふ論文に於いて、ラッファルス・シュヴァイガーが此問題を遺憾無く詳論して居り、又、ゼーリガの「人類に對する個人の社會的關係」及びヘルマン・クラインの「個人倫理と社會倫理との相互關係」(ベルン論叢一九〇四年、第三十六及三十七卷所載)等の諸論說も同様なる方向にあるものである。此等論文の結果が必しも悉くラッファルスの爲めに有利なる斷定に歸着しない原因は、蓋し民族心理學の創建と吾人との間に七十年の歲月が介在する所に存するのである。吾人は當時とは別個の方法により、別個の着眼點に隨ひ、別個の目的の爲めに研究を重ねて居り、隨つて又全然別個の結果に到達するのである。人物に對する尊敬は、常に益々、科學に對する義務の背後に退讓した。シュタインタールが巴里にあつてコムトの影響を受くること少いのみならず、寧ろ「實證哲學」の著者に關して頗る輕蔑的非難的なる報告を、彼れの友人にして後年の義兄たるラッファルスに送つたことは惜しむべきことと謂はなければならぬ。若しコムト、コンドルセ、ヴィコー等の諸家に就いて研究一段と深かつたならば、シュタインタール及びラッファルスは、彼等の求むる所はコムトが既に大體に於いて之を有つて居

たといふことを、必ず承認するに至つたであらう。シュペングラも亦同様にかくすることによつて得る所鮮くなかつたに違無い。勿論其名は哲學的に不遇なる「社會學」といふのであつた。併し乍ら實質は確かに存在した。而して最後にハーバート・スペンサーの「社會學」が、理論に於いても叙述に於いても、嘗てラッファルス及びシュタインタールが、四半世紀以上の長年月に亙る共同作業に於いて纔に其の建築石材を搬入するに止まつたかの大體系を、實際に於いて完成竣工したのである。尙ほ兩者の共同作業の有様に關して一言の蛇足を加ふるならば、それは、「優美と威嚴」の諧音に關するシラーの要求が、ラッファルスの側には優美、シュタインタールの側には威嚴が代表せらるゝといふ風に分配せられ居ると謂ひ得る。余の觀る處を以てすれば民族心理學の首唱者がラッファルスであることは、動かし難い。同様に余は一八五一年に現はれた「民族心理學の概念と可能性に關して」と稱する斷案的論文が、其の要點に於いてラッファルスの精神の所産であると斷定する。随つて時間的の優先に就いては今更論議の餘地がない。而かも真相は飽くまでも真相として之を尊重しなければならないであらう。即ち仕事其ものは、必しも全然と謂はざるまでも、少くとも大部分は、シュタインタールの双肩に繋り、之に反して仕事の收穫——勿論精神的なる——は當時尙ほ神の如く尊敬せられたる義兄弟に對して、シュタインタールの手より、其の大半を捧げられたるものである。現に當初の數年間、ラッファルスは尙ほ所説の寄稿を怠らなかつたが、試にかの雑誌の後半十二巻を検すれば、ラッファルスの協力は寥々として殆ど見

るべきものなきを知るであらう。豫感力、雅懷、奇想、乃至當時の人の耳に快き流麗なる表現、此等の要素を以て到達し得る處は、ラッファルスがその獨特の優美を以て之に當つた。之に反して深く穿鑿し知識の下層を發掘し、隱微の裏面を剔抉するといふ段に至れば、シュタインタールの威嚴が専ら之を事とした。

ブルツツの主宰せる Deutsches Museum 誌上に、ラッファルスは一八五一年、上に述べた論文「民族心理學の概念及可能性に就いて」を發表した。此論文に於いてラッファルスは從來恰も薄明の中に彼の眼前に搖曳しつゝあつたと思しき、綜合精神の概念を、初めて完全なる關係に於いて検討した。案するに彼は之を以て一個の新しき科學が創建せられたと考へたらしい。彼が此の穿き違ひの「發見」を、三週間の間に「熱病の如き脈搏を以て」一氣呵成に書き流し、而して其の仕事の過勞の爲めに精力盡きて倒るゝに至るまで彼をして身震ひせしめたる發見者の狂喜、此の年少氣鋭なる熱狂者が、往年アルキメデスが、その排水重量の法則を發見したる時の「Eureka」(余之を發見せり!)の絶叫にも比すべき有頂天の歡呼を發したることに對して、吾人は多く之を咎めざるのみならず、寧ろ人間的に同感することが出来る。而かも歴史の距離に立ちて之を顧みれば、此の穿き違ひの新しき科學に對する熱狂は著しく冷却しなければならぬであらう。新しさに就いて、いへば、その問題は哲學其自身に比しても決して餘り若くはない。アリストテレスは人間の「綜合精神」のみが不滅であると説いたが、(但しこ

れに能動的理性及び受動的理性の別を樹てたるは後の祖述者であつて、アリストテレス自身は單に質料について論じたのみである。)この説は凡ての民族心理學の典型を包蔵するものである。國家目的としての意志の統一といふことは、プラトンの古い根本思想であつて、彼れはトラキア人、スキイト人及ヘレーネ人を、既に全然ラツァルスの意味に於いて、民族心理的に叙述描寫して居る。而して最後に、中世全部の哲學的中心問題——所謂普遍問題は、ラツァルスの根本問題「普遍に對する個物の關係如何」以外の何物でもない。唯だラツァルスは、之を個人對人類精神、民族精神及國民精神の關係に限定するに過ぎない。是れ決して何等新問題の提出に非ず、陳套なる宇宙問題がラツァルスによりて一個の「民族心理的」なる——吾人は、今日之を「社會學的」と稱するであらう——變形を與へられたるに止まつて居る。寧ろ、ラツァルスの問題は、一層廣汎なる宇宙問題の社會學的特殊例に過ぎずと稱するを安當とするものである。之に比すれば個別と普遍、單例と種類、個々の感覺と論理的概念、個人と其の宗教團體、民族團體及國民團體、一個の市民と國家等の如き問題が由來に於いて一層早く、價値に於いて一層高いものである。

中世に於ける普遍の問題の研究者を除けば、ヘーゲルの「客觀的精神」の説は、ラツァルスの「綜合精神」に對しても、ヴントの「集合意志」及び最近の學者等の「普遍的精神」と名くるものに對しても、その直接の模範となつて居る。アリストテレス及びヘーゲルこそ、後にラツァルス、ヴント及びシュペ

ングラーが、各々其獨自の方法を以て改修補綴したる這個の思想の真正なる父である。

いふまでもなくラツァルスはプラトンの哲學からも亦新生面を獲得した。ラツァルスとシュタインターとの共同編輯に係る前掲「民族心理學及言語學雜誌」が初めて現はれたる時に、その旗標として振り翳し、而して爾來今日に至るまで遂に之と肩を並ぶるものなき程の成功を收めたる「民族心理學に關する序說的思想」の一文に於いて、社會學的プラトン主義——余はラツァルスの世界觀に冠するに此名を以てせんとする——はあらゆる方面より聲援と賛成とを得た。綜合精神——それはプラトンの理念を社會學的に解釋したものである——は、ラツァルスに隨へば、より早く、より根源的なるものであり、而して個別精神は、その存在と權利とを綜合精神より受くるものである。彼は、個體を全然没却無視することプラトンの如くではないが、併し之を無二無三に類の中に組み入れて仕舞ふのである。「余は、到處に、綜合精神を認識し保持せんことを努むるも、而かも之が爲めに個體を失ふことなからんことを欲す」と、彼は嘗てグラーフフンダーに宛て、書いた。ラツァルスはその民族心理學によりて、綜合精神を「科學的自己意識」にまで導かんと欲する。彼は共同生活に於いて四個の形式を區別する、即ち、言語、公共的勤勞、公共的精神及び立法是れである。「綜合的思想と民族心理學」(前掲雜誌第三卷所載)に於いて、此思想は客觀的精神が發現する活動様式は五種に分るといふ風に補足せられて居る。又ラツァルスは「個物と全體との關係」を更に他の一論文によりて特別に考察して居るが、此論文

も亦爾餘の彼れの著作と等しく、通俗性を失はずして而かも最も高雅なる文體に於いて書かれたものであると無條件に讃辭を呈するに憚らない。學問を實際に進歩せしめたるものはシュタインタールである。而かも之をあらゆる方面に普及せしめたることはラツァルスの不滅の功績である。ラツァルスが前代に對して意味するところは、即ちシュペングラが吾人の時代に對して意味するところである。

十九、ラツツェンホーファー及び現代社會學

然るに、グスターフ・ラツツェンホーファー(一八四二—一九〇四)に歸すべき功績は、之に反してかのラツァルス、シュタインタール流の「民族心理學」に代ふるに、一個の獨逸的「社會學」を以てしたることである。ラツツェンホーファーは、政治的、社會的問題の途を辿つて純正哲學に到達した。彼れの最初の著書「社會學の一部並に國家科學の基礎としての政治の本質と目的」(全三卷、一八九三年發行)は、コムトの影響下に立つて居る。ただコムトがその實證哲學の體系を社會學を以て完結したるに反し、ラツツェンホーファーは彼れの世界觀を社會學の基礎の上に建設したるの差あるのみである。ヘラクリスの「争闘は萬物の父也」は、ラツツェンホーファーが「絶對的敵視の法則」を掲げ、「絶對的敵視は政治に於ける原力也」を以てその政治學の公式となしたる端緒を爲すものである。既に如上の公式のみを以てするも、ラツツェンホーファーの方向が自然主義的にして、マキアヴェリと一脈相通するものであ

ることは明かである。彼に取つてはゲーテの如く藝術即自然に非ずして、ヘルダーの如く「歴史即自然」である。如何となれば、ラツツェンホーファーは既に一個の「原力」を認識するが故である。随つて亦「人類の歴史は一般的自然歴史の一特例に外ならず」とする自然主義的基礎觀念が自ら生ずる。人間は單に全自然の一截片に過ぎず、随つて獨りその機構及成分に於いてのみならず、そのあらゆる内面的靈的經驗に於いて亦無條件に普遍的自然律に服従すべきである。原子が引力と反撥力とによりて、彼等の相互關係が調整せられ、若くは化合が親和力と反抗力とによつて行はるゝが如く、社會に於ける人間は、自己保存の根本的努力(ストア學派に於ける「自己を保存せんが爲め」及びスピノーザに於ける、「自己たらんことを欲する」)によつて形作らるゝ。斯くの如くラツツェンホーファーに隨へば、必要缺くべからざる物質的要求の満足が歴史の本來の主題である。またコムトと等しくラツツェンホーファーも亦社會的靜態、即ち實現せられたる社會的平衡の靜止狀態と相並んで、社會的動態即ち歴史の運動律を認める。若し生産方法、國家的施設、社會的秩序、及び支配的思想(コムトは之を「Idee mène」と稱し、テューヌは之を「Idée matrisse」と名づけて居る。共に社會を支配する主要なる思想の意味である)等の間に於ける平衡が破壊せらるゝならば、階級闘争若くは人種闘争が、歴史に於いて、此の平衡を嚴正なる進化の法則に従つて實現せんことを求めて止まない。這般の進化法則(コムトに於ける「Progress」)とは、生存の爲めの社會的闘争に於ける不斷の進歩の意味である。嘗てサ

ン・シモン、コムト及びスベンサーが一致して高唱したるが如く、戦争的典型は次第に産業的典型に其地位を譲りつゝある。現代の文化圏内に於ける甚しく破壊せられたる政治的及び社會的平衡はラッツェンホーファー並にコムトに随へば、利害關係の衝突を驅除せんとする公則の方向に目標を立てて進みつゝある。ラッツェンホーファーは、之を名けて「政治的慾望の調和」となし、コムトは之を「精神的權力」若しくは「精神的權威」となして居る。コムトは疾く既に「國家に於ける個人は、原子の如く一個の架空事である。各個人の血液の毎滴中に、過去に於ては父祖の類的經驗が流れて居る。靜止の状態(即ち、社會的停頓の状態)にあつてこそ或る家族の範圍内に在る個人、特に所謂父權を具有する家族の首長に、一種の社會的意味が歸屬するであらう、併し乍ら一度家族より出で、種類民族、或は國家に移るに及んで、個人は全然自己を没却して集合體即ち國民に其地位を譲らなければならぬ、而して最後に機械の時代に至れば、個人は、計算を要せざる微量に低落したる。巨大なる怪物である國家は、先にホプスが道破したるが如く個性を壓伏して自動人形に墮らせしむる——市民は一種の投票機械、社會的に有用なる行爲を遂行せんが爲めの傀儡である。ラッツェンホーファーに随つても亦、文化國家に在りては個人は彼を圍繞壓制する社會的關係から解放せられない。「社會的單位」としての政治的個體とは、ラッツェンホーファーの説に随つても亦一種の「造りごと」に過ぎない、單に政治的人格(集團、政黨、而して最高位としては國家)のみが一個の社會意志の一單位を代表する。コムトに於け

る如く亦ラッツェンホーファーにありても亦、凡ての進歩したる國家に於いて個人の目的を調整するものは、獨り類體たる「人」のみである。故に政治といふものが個々の市民の正常なる利益を保障し、市民をその正當に獲得せられたる權利に於いて擁護することを努力する限り、政治の本質は依然として個人主義的であるかも知れないが、而かも凡ての政治の目的は、畢竟文明と文化とであることは疑を容れない。カントの説く所に従へば、歴史の途は、「開墾」「開化」及び「道德化」の三標碑によつて標示せられ、随つて野獸的動物性より人道に到るまでの道程は、斯の三階段を通過しなければならぬが如く、同様にコムトが(要するにチュルゴの説を踏襲して)人類をして結局實證的局面に到達せんが爲めに、先づ神學的及び形而上學的的局面を通過せしむるが如く、ラッツェンホーファーも亦文明と文化とは狡計及び暴力を制して、よく最後の勝を得せしめ、随つて類としての利益、人道、「政治的慾望の調和」が私益と個人利益とを征服する。ラッツェンホーファーが人間同志の相互關係を科學的範疇の下に持ち來たさんと試みたる「社會學的認識」(一八九八)へ到達する一直線の途は茲に發して居る。アメリカに於ける社會學者の巨擘レスター・エフ・ワードは、ラッツェンホーファーの「社會學」を以て最近十年間に於ける最も重要な社會學的貢獻の一に數へた。グムブローヴイチの如きは、古往今來、政治的並に社會學的文獻に於いて之と比肩するに足るものなしと誇張的頌詩を敢てした。オットー・グラムツォフのラッツェンホーファー評傳は、斯の如き狂熱的讚美の迸發を差控へて居る。余自身も一九〇四年

夏、當時ラッツェンホーフアー尙ほ在世中、ウインナ「ノイエ・フライエ・ブレッツセ」に三篇の論文を寄稿してラッツェンホーフアーを論評した。此論文は多少形を變へた拙著「社會的樂觀主義」(一九〇五年)中に採り入れられた。同書に於いて、余はラッツェンホーフアーの社會學の基本原則を次の如く摘要した。自然界と歴史との「法則一致」を初めて吾人に教へたものはヘラクリトスである。ヘラクリトスが凡ての進化説の祖先であり、且、スベンサー及びラッツェンホーフアーの世界觀を支配するが如く、彼は亦「凡そ生物學的法則と社會的法則との合致といふことは、それが類似性に基くと同一性に基くと論なく、悉く一切の現象の法則は一致といふ前提に於いてのみ考へ得る」と断定するラッツェンホーフアーの社會學の有機的方法を、その原則に於いて先鞭を着けたるものである(同書一七四頁以下)。

斯くの如く、謂はゞ「先決問題要求」(Positio principii)として要求せらるゝ「法則一致」を、ひた押しに自然界と社會との凡ての境域に對して強行適用したることが、ラッツェンホーフアーの社會學の眞個の業績である。同一なる目的の爲めにスベンサーは、その「敘述的社會學」の滾々として盡きざる源泉より比較人種學的材料を採り來つて他を説伏せずんば止まざらんとする。然るにラッツェンホーフアーは之に反して、極微の刺戟にも直ちに反應する無類に活潑にして玄妙なる想像力を以て事に當るといふ傾が多い。彼に取りて「宇宙の法則一致」のドグマは牢乎として儼立する。物理學、機械學、地質學及び化學は、進化の法則形式に關する限り、原則的には社會學と何等の差別を見ない。化學の法則は

何等の無理も無く秋毫の懸念も無しに、直ちに之を人間の社會に適用移植し得るものである。而してラッツェンホーフアーは、「化學的並に社會的事象に於ける原因の同一性は、以て分子説の成立を斷定し得る支柱たるに適すといふことを公言するの勇氣を有する」。更に説明の曖昧を避けんが爲めにラッツェンホーフアーは、彼れの法則一致の「一元論」を極端に押し進め、「有機的生命過程と社會的過程とがかくの如く合致するは、決して形容的の比較ではなく實に因果律的である」と大聲疾呼する。

然しながら斯くの如き「法則一致」は、之を前提とすべきものではなく、先づ之を證明しなければならぬものである。ラッツェンホーフアーが社會學的に吾人に賞翫せしめんことを欲する珍味佳肴たるこの「同一哲學」と、曩にフィヒテ及シリングが之を主張して而かも完全に理路の首尾を確立することを得ざりしが爲め、ヘーゲルが彼の「精神現象論」の有名なる序言に於いて之を揶揄し、是れビストルより發射せられたるが如く唐突にして、夜は凡ての牝牛が黒しといふが如き奇怪事に類すと爲したる「法則一致」とを混同してはならない。エレア派哲學者よりスピノーザに至る凡ての同一哲學者は「存在と思考は唯一なり」「萬有と存在するものは同一也」——是れ汎神論の根本公式である——この主張に彼等の辯證的發足點を求めて居るが、此等人々とラッツェンホーフアーとの間の如くに、非常に大なる距離に立つて展望するならば、凡ての複雑性と差別想とが消え失せることは謂ふまでもない。併しそれは觀察者がその占むる立場の高い觀測臺から展望するが爲めに仔細に物の見別が着かないのに

過ぎざること、恰もアルプス登攀者が絶頂に立ちて、谷底の小丘を見分け得ざるが如くである。印象の單一平板は、畢竟小丘それ自身に出づるに非ずして、展望者の擇びたる地平線に基くのである。

這般の消息を洞察したる者は、ラッツェンホーファー、シュベングラ、フィヒテ乃至シェリングの徒と雷同して、形而上學的空中飛躍や、健全なる人間理性の死の跳躍によりて、一舉如上最高統一に昂騰せんとするの愚を敢てせず、寧ろ歴史的に効果を確證せられたる哲學的諸體系に導かれてかの絶頂に登攀するの舉に出づるであらう、若し哲學にして、自然及び歴史に於ける宇宙の風土誌を提供し、之れによりて理智的地球儀を精密に測量せんことを欲するならば、宜しく經驗的歸納的に開始し、單一にして個々なるものより出發し、事物と對象とを、顯微鏡的近接に於いて彼等の現實性を檢覈すべきであり、決して肉眼を以て視分け得る距離に立ちて、自己を思考せられたる可能性として對立せしめ、然る後に現實を、無證明に假定せられたる統一から演繹的に導來することを敢てしてはならない。ラッツェンホーファーは之を前にしてはフィヒテ、時を同うしてはオストワルト(一八五三)之を後にしてはシュベングラと等しく進化論者である。而して「意識無くしては存在なく理智なくしては個性的存在なく、而して感覺無くしては意識あることなし」とするラッツェンホーファーの核心原則は、之を認識論的に觀ればその唐突正に「自我は自らを確立す」とするフィヒテの最高主張と相匹敵する。兩者にあつて、思考は「汝の意識を定立せよ」といへる一個の假定、一個の要求を以て始まつて居る。證明せらる

べきものが、既に證明せられたるものとして豫め採り上げられて居る。この先決問題要求を容認するものは、尙ほ何處までも此體系に信を措くことが出來よう。併し乍ら此體系の入口に於いて、疾く既に如上の假定條件に批判的に躓くものは、それ以上一步も前進することが出來ない。さればこそヘーゲルはかの「思考と存在」「精神と自然」「意識と外界」の同一に關する主張は、之を主張として哲學の冒頭に据ゑずして、避くべからざる論理的結果として哲學の末尾に置くべきものなることを明示して居る。ヘーゲルの推理は論理的辯證的のものであつて、吾人今日の趣味とは甚だしく相容れないであらう。之に反して、進化論に於ける他の巨匠ハーバート・スペンサーは、その著「第一原理」に於いて、彼れの「認識すべからざるもの」——その力の發現を、吾人は結果として意識の中に確把するもの——に到達するに、ヘーゲルの如く辯證的方法によらず、物理學、化學及び精密科學の途を辿り、順次その各々に就き綿密に疑を質しつゝ進むの方針を採つた。ヘーゲルの出發點は、理由と繼起との因果關係による認識根據であり、スペンサーのそれは、原因と結果との因果關係による實在根據である。即ち、ヘーゲルは論理的演繹的に論を進め、スペンサーの學説は之に反して心理的歸納的である。ヘーゲルの論理的「素地」は「理」であり、「思惟」であり、「存在」である、スペンサーのそれは、感性的經驗である。それにも拘はらず兩哲人は共に一個の最高なる統一點に到着した。恰も曩にスピノーザが、認識根據と實在根據とが、延長及思惟の兩屬性に於いて並行に走るとなしたが如くである。之に對して第三の

途を辿る者は、「民族心理學」に於けるヴント及び「西洋の没落」に於けるシュベングラールである。彼等は生物質、細胞、原始蟲、單細胞有機體の代りに、傳説、神話、宗教、法律、美術、科學等を、その起原と歴史的變遷とに於いて傾聴し、之によりて歴史の道程を迂回して人類存在の意義を究明せんとしたのである、此の道は余輩に取つて、ラッツェンホーフアーの辿つたものよりも平坦歩み易いやうに思はれる、吾人の觀るところを以てすれば、社會學の基礎を認識論的に定むること、並に哲學的體系形成の心理學こそ、吾人の時代の最も緊急なる要求である。此要求に適應するや否やの點に於いてシュベングラールはヴントに比すれば遜色あるを免れない、蓋しシュベングラールは先天的構成から脱離することを解せざるが故である。彼が豫想する法則統一性は、前提として出現することを許されず、寧ろ結果として獲得せらるべきものである。

ラッツェンホーフアーの世界觀は、彼れが社會學より採り來つて形而上學に移植したる一種の普遍化を基礎とする。「固有なる興味」は、彼れの社會學の中心概念であつた。此社會學に於いて自己興味より類の興味への向上が説明せられたが、今やそれは天體物理學的普遍化にまで進行した。天體より原子に至るまでのあらゆる現象形式、及びあらゆる有機組織は、悉く原力の一部であつて、各自に適宜なる進化發展に於いて固着的の(或は固有の)興味を有つて居るこせられた。

フォン・ハルトマンが無意識の凡ての現象を、ショーペンハウエルが意志のそれを、ニーチェが「權力への意志」の發現を、若しくは世界空想の哲學者フローシャマー(一八九三年歿)「世界過程の根本原理としての空想」を著はす(譯者)が空想のあらゆる發現形式を、而してシュベングラールが進化形相を把握せんと努めたるが如く、ラッツェンホーフアーは「固有的興味」の中心思想より出發して、知識の凡ての領域を残る隈なく探究網羅し、よつて以てかの「固有的興味」の表現形式を通觀せんことを欲する。此の根本原則を、「實證的一元論」(一八九九)は生物及び無生物の世界の全般領域に於いて、「實證的倫理」(一九〇一)は人類道義の範圍に於いて、最後に「知力の批判」(一九〇二)は心理學及認識論の領域に於いて遺憾無適用せんことを欲したものである。凡そあらゆる哲學的體系が、唯一の中心點より發光して知識の周圍を遍ねく輝かすものである如く、ラッツェンホーフアーも亦かの「固有的興味」といふ中心點よりして自然科學及精神科學を完成せんとするが、それは唯だ此等の科學が、彼れの根本思想に取りて明らかに何等か裨益するところある場合に限るのである。ラッツェンホーフアーの體系に従へば、實證的一元論は、自然と精神との法則一致を主張する。この一致は、唯物論者は之を「物質」の中に、唯心論者は之を「意識」に、エネルギー論者は之を「單子」或は力の單位の中に求める。カント及びスベンサーが到底認識不可能と宣言したる「物自體」は、畢竟久しきに亘つて吾人の心情を鎮靜ならしむることが出来ない。カント自身が容認したる「形而上學的要求」は、此の「認識不可能なるもの」の象徴化にまで吾人を強要する。而してラッツェンホーフアーにありて、斯かる要求は、即ちかの引力を以てその本質若

くは屬性とするところの「原力」に外ならない。「原力點」は「力の外皮」に包藏せられつゝ、引力の法則に隨ひ、自在に空間に搖曳飛翔する。彼等は潜在的精力の保持者たる「元素原子」を形作る。引力と反撥とは、ラッヴェンホーフアーにありて、恰もハーバート・スペンサーに於ける合一と分化との永遠なるリズムと同様なる、宇宙構成の役割を演ずる。

ラッヴェンホーフアーは、あらゆる力の統一を斷定する。随つて生命も亦此統一の中に包括せられる。ラッヴェンホーフアーに取りて、生命は決して「特種類の一現象」ではなく、寧ろ化學的親和の一過程に於いて現はるゝが如き一種のエネルギーの相に外ならない。一見生命なき自然界に於いて潜在的エネルギーとして作用するものを、吾人は生命ある世界に於いて、之を自ら自己の機關を創造したる「固有的興味」即ち意志と命名する。随つて人間の意識も普遍的エネルギー法則の例外をなすものではない。あらゆる人間性の花である道德律と雖も、原力點の天賦の興味と相關聯する。價值及び目的の世界、即ち道德的に當爲なるものは、自然律的に確定せられ、エネルギー公式の中に既に點線の如くに豫定若くは下拵らへせられて居る。個人的利益より共通利益へ、利己主義より愛他主義への向上は、ラッヴェンホーフアーにありて、恰もコムト及スペンサーに於けるが如く、嚴密に規定せられたる自然律的過程として行はれるかの審美的感覺すらも人間生得の興味性の中に基礎を有する。

「知力の批判」以來、「是も根原的なる經驗としての意識」がラッヴェンホーフアーの思想の正面に進出して居る。今や「感覺が有機的生命の最初の經驗」であり、「意識無きところに存在は無い」。人間の低級なる機能の代りに理智が現はれる。而してラッヴェンホーフアーが最後にキールの植物學者ラインケ及びその「支配力理論」(Die Dominanztheorie)を知るに及んで、彼れ思想には截然たる一轉機が行はれた。一九〇四年五月二十六日「アルゲマイネ・ツァイトゥング」紙の科學附録に於いて、ラッヴェンホーフアーは「社會學及びラインケの支配力理論」と題する一論文に其所見を發表した。ラインケの所謂「支配力」若くは、「體系力」は、今や著しく「固有的興味」と接近せしめられた「原力」に由つて機械的に與へらるゝ生命は、覺醒せる意識にありては、生得の興味によつて指導せらる。……興味とは有機體の小宇宙の中に意識を保持するに必要な材料配置状態(Die Stoffkonstellation)即ち「體系力」が存在する限り、支配的原力が、その意識を保持せんとする意志を表現する所以である。斯くの如くにして吾人は、再びあらゆる現象の統一的原則、即ち意識能力ある原力といふ永久なる謎に直面する」云々。此の原力の發展は、ラッヴェンホーフアーに隨へば、因果律的必然性を以てし、最終的必然性を以てするものではない、換言すれば、原力は單に、その推移經過の法則を識るに止まりて毫もその目的——況んや究極目的——を識つて居ない。然るにグラームツォーフが正當にラッヴェンホーフアーに對して駁論するが如く、「自己保存」とか、フォン・ベルの所謂「目的努力」とか、或はラッヴェンホーフアー自身の體系に於いてすら、世界の變遷過程に於ける「原力の完成努力」と云ふが如き目的構成が、依然として

上述の現象と相並んで其地位を保つて居るのは如何したものであらう。然り余は更に一步を進めて言ふ、ラッツェンホーフの基本公式即ち所謂固有興味は、一個の目的論的公式であつて、決して嚴正に因果律的公式ではない。何となれば、吾人が既に論じたるが如く、凡そ因果律的なるものにおいて、常に部分が全體より、原因が結果より先行し、随つて其都度の現在は、必ず過去によつて支配せられる。之に反して、目的論的なるものにあつては、全體は其の諸部分に先つて存在する(例へば、卵細胞の中には、將來の有機組織全部が豫め形作られて居る)結果は之を喚起する原因に比して時間的に早い。而して其都度の現在は因果律的順序と趣を異にし、過去によつて支配せられず、將來、換言すれば、達成せらるべき目的、によつて支配せられる。若しラッツェンホーフの主張するが如く、「固有の興味」が直に古來求めて得られざりし世界公式であるとするならば、あらゆる起生の經過は、此の固有の興味に従つて豫め形作られたる、即ち豫定せられたる宇宙計畫に随つて進展しなければならぬ筈である。然る時には個々の力若くはエネルギーは勿論、自然律其ものと雖も件の固有の興味の普遍的至上命令に臣従すべきものである。

若し之をしも形而上學に非すと謂ふならば、凡そ世に形而上學と呼ぶべきものあるを知らない。ラッツェンホーフの世界觀は、現代の術語學の埒内に於いて精力論的汎神論である。それはフィヒテの倫理的汎神論に最も近接して居る。兩者共にスピノーザから出發する。但しスピノーザは數學が完

成の域に近づきつゝあつた古典的時代に生を享け、随つてその「倫理學」を叙するに幾何學的方法によつた。即ち彼れの汎神論は數學的汎神論である。スピノーザの「本質」は恰もユークリッドの公理が必然的なる「定置」に外ならざる如く、畢竟、直觀的理性の思惟必然的なる論理的「定置」である。論理的公理としての「本質」は、數學的公理と同一なる自明性を有する。數學的公理は下より上に、部分より全體に、感性的經驗より最後の普遍化に、進展するように推論若くは説明せらるゝものに非ずして、反對に凡ての感覺與件は、此の最高「定置」によりて要求せられ規定せらるゝものである。之に反してフィヒテは、カントの「至上命令」の埒内に於いて彼れの體系を構成した。フィヒテに取りて本質は、スピノーザに於ける如き「存在」ではなく、一個の「當爲」、一個の解決せらるべき問題である。一個の満たさるべき超絶的義務である。「神即自然」は、スピノーザに於けるが如く幾何學的靜止的には非ずして、ライブニツに於けるが如く力學的運動的である。フィヒテの汎神論は目的論的進化論的であつて、本體論的論理的ではない。本質の發展の方向——その支配力その企畫——は、随つて倫理的實行的である、存在ではなくて行爲である。「神」とは「最高秩序」、即ち人間に於いて、及び人間を通じて、次序的に遂行せらるゝところの世界秩序と同義である。フィヒテの時代は著しく辯證的思想的なる時代であつた、是れフィヒテが彼れの世界觀を描出するに、スピノーザの如く幾何學的方式に出づることなく、辯證的方法を好んで用ゐるシュリング及びヘーゲルと等しく辯證的方式に出でたる所

以下である。然るにラッツェンホーファーはダーウイン、スペンサー時代の兒である。ダーウイン以來、生命問題が吾人の時代の唯一の問題となつた。ダーウインによつて、科學の生物學全盛期が呼び起こされて以來、人生に於いて吾人の興味を支配すること甚だしきもの、生命其自身の如きはない。而して生物學と共に最も著しく前面に顯はれ來つたものは目的觀念である。かくて吾人は、かの「新活力論」(Der Neovitalismus) 的の運動を有するに至つた。スペンサーはシェリングを更新し、オストワルトは自然哲學を更新した。此等の思想作業場の中にラッツェンホーファーは、當初見習徒弟として入り込み、而かも見る間に親方として顯はれた。哲學史的關係は彼に缺けて居る。それ故彼は嘗てヴントを引用しつゝ、「感情は認識の先驅也」と唱へ、而かもリボー(一八三七—一九一六)が、同一思想を根柢として第十八世紀頃英國を風靡したる一種の世界觀を更新したることに想ひ及ばない。此の「感情」を以てラッツェンホーファーは諸種の問題を把握したが、間もなく問題が彼を捕捉した。不可抗の力を以て彼を汎神論に牽き附くる内在的論理は、彼としてその「原力」を、スペンサーの「不可知なるもの」及びカントの「物自體」と同一化せしめる。哲學史的思考の因縁なしにラッツェンホーファーは無二無三にフィヒテの麾下に馳せ參じた。併し乍らフィヒテが思索的天才であるに反し、ラッツェンホーファーはハーバート・スペンサーに追隨し、生命と自然知識との困難なる學校に於いて薰陶せられた思想家であつて、フィヒテ高翔に隨伴すること能はず、又その哲學史的認識に到達することを得ない代りに、吾人の時代に於ける

自然認識の諸原則に對する豊富周到且つ精細なる理解によつて、優に此弱點を補つて居る。隨つて彼れの方法は、フィヒテの如き辯證的のものに非ずして、ラインケ流の生物學のものである。併し乍らその主要思想に於いて、その實證的一元論の體系の構成に於いて、彼は、畢竟スピノーザ及びフィヒテと等しく汎神論者である。

併し乍ら、若し社會學をして、科學的存在權利を享有せしめ、若くは更に進んで社會の哲學なりとの主張を提げて起たしめんとならば、それは曩にコムト及スペンサーによつて指示せられたる途を藝地に辿り進まなければならぬ、而して此の途とは、歸納的方法の外にはない。社會學は宜しく事實より原因に上向すべく、決してラッツェンホーファーの如く、形而上學的假定として掲げられたる原因——所謂「原力」若くは「固有的興味」の如き——より事實に下向してはならない。先づ叙述次いで説明すべく、決して先づ説明、次いで叙述すること、ラッツェンホーファーに見るが如くであつてはならない。第一に實在理由、次に認識理由——是れ苟も精密科學たらんもの、要件である。

事實より出發して、漸次に説明、若くは經驗法則、更に進んでは歴史に於ける合法則性にまで上つて行く道筋が、一にして止まらざることは、カール・ラムブレヒト、クルト・ブライシッヒ及エルンスト・シュベングラー諸家の足跡に徴して明かである。或は比較人種學を參考とすること、タイラー、マツクレナン、ラボック、モルガン及びスペンサーの如き英米學者又は獨逸側に於いてバステリアン以來、就

中、シュタインメッツ——和蘭の社會學者、一九〇八年以來、アムステルダム大學の講師、獨逸語の著書あり——及び伯林のフィアcant——其著「文明變遷に於ける恒常性」(一九〇八)——等が異常なる成功を示したる例に倣ふも可い。或は又ケトレー及びフォン・オェッティンゲン以來の諸家に範を採つて統計、特に犯罪及び道德統計を參酌するも可い。かくすれば吾人は一群の社會的事實、即ち原始民族に對する人類學的人種學的事實、及文化民族に對する統計的人口學的事實を掴むことが出来る。斯くすれば吾人は始めて、社會學的普遍化の高樓を其上に建設すべき、事實といふ磐石を脚下に踏まへることが出来る。吾人が先づ社會的起生の這般の實在理由を究め得たる時、そこに始めて認識理由を語るべき時が来るのである。

併し乍ら、社會學上の所謂「有機説派」の生物學的方法(例へばリリエンフェルト、ルネ・ウォルムス)も亦若干の權利、少くとも發見術的價值を有する。若し吾人が有機説的法律學(ザヴィニー及ブルンチリ)及び有機説的歴史哲學(シェリング及浪漫派)並に活力論的自然哲學(フォン・ブンゲー、ラインケ、ドリーシユ)の説く所に隨つて、社會の形態も亦凡ての有機體(細胞組織、共棲體)と同様なる法則に従つて推移するといふことを認むるならば、吾人は生命現象の法則を檢究し、之より社會現象を前者の特殊なる場合として推定しなければならぬであらう。さすれば、社會學は一般生物學の一節となる。即ち、人間の社會構造に適用せられたる生命の一般法則といふことになるであらう。此の生物學的方法

は偏狹の誹を免れず、實際に於いても學問的破船の厄に陥つたことは事實であるが、而かもそれは事實——生物學的事實であつて、直接に社會學的事實では無いけれども——から出發して居ることは之を認めなければならぬ。例へば、人種學及び比較歴史學的方法を採る者の如き是れである。

最後に第三の道筋も亦可能である。即ちゲオルク・ジムメル(「社會學」一九二二年)、エミール・デュルケーム及びレスター・エフ・ワードの採りたる心理學的及論理學的方法である。之によつて、社會心理的現象はその根原及認識内容を檢討せらるゝと同時に、又その普遍化可能性の限界を點檢せられる。ヴントを宗とするウインナの社會學者ルードルフ・ゴルトシャイト(オストワルト自然哲學年鑑一九〇八年七月發行、二二九頁以下所載「社會學と史學」)及びルードルフ・アイスラー(其著「社會學綱要」は、ヴェーバー「繪入諸學問答叢書」第三十一卷を成し獨逸語を以て書かれた著述中最有用なるもので、アムリヒ、エロイテロブロス兩氏の類著を遙に凌駕する)等の努力も此方向に存する。ルートヴィヒ・グムプロウイツチの「社會學概要」はラツェンホーファー歸依者の所依本經である。歴史的概念形成の論理的問題を提起したるヴィンデルバント、リッケルトの所説は、全然認識論的方向に進むものである。之を要するに今日の社會學者、就中ハイデルベルク派例へば、リッケルト、ヴェーバー兄弟、トレオルチ、ゾムバルト等は、この若き科學の核心問題を、心理的、認識論的若しくは論理的方面から切り込んで行くもので、是れ實にラツェンホーファーに於いて全然見ざる傾向である。社會的事實の記述より出發す

る人類學的方法、生命の事實と法則とより發足する生物學的方法、乃至、個人及社會の精神生活を基礎とする心理學的論理學的方法等が、ラッツェンホーフアーによつて徹底的に追究せられなかつたことは勿論、此等の方法の有効なるや否やを検討せられたことすらなかつたものである。苟も現代の社會學に於いて、最近數年間、關與者の科學的興味を猛烈に昂騰せしたる火の如き方法的論争に對し、眼を閉ちて没交渉であることは最も憂ふべきことである。併し乍ら、如上三様の競争的方法の中、其の孰れもが、徹底的に究明せらるゝは愚か、眞劍に迎らるゝことすら稀であるといふことは、慥に一種の科學的怠慢罪と稱すべく、之を指摘するも、決して余輩が尊敬して已まざる幾多哲人に對する適宜なる顧慮の缺如を意味するものではない。哲學的獨棲を誇り、自己の偏愛する思想に耽溺すること、恰も作曲家が、頭腦に纏綿して去らざる主導モチーフに於けるが如く、而して此主題を自然及歴史を通じて變形曲に作り上げんと欲するといふのが、現在好んで採らるゝ態度であるが、之に關して吾人は既に所見を開陳した。各人自ら「一人者」を以て居り、凡ての同時代思想家に對して、王者の態度に於いて哲學的批判を敢てするとき、其處に、辯證的の思想的無政府狀態、若くは自己中心的道樂哲學が生ずるのである。

ラッツェンホーフアーの遺著「社會學」(一九〇七年)は、一卷の政治書であつて、彼れの「社會學的認識」の續稿といはんよりは、寧ろ「その政治の本質と目的」全三卷の續稿と稱すべきものである。政治

は應用社會學である。而かも、前者に於いては個人的確信や氣分の迸發や日常の趨勢に對する考察が容れらるべき餘地あるに反し、實證的一元論の立場を嚴守してあらゆる假説を排せんと擬するところの社會學にあつては此等のものは全く容れらるべき餘地がない。「社會學」は冷靜恬淡に社會的事實——人種學的事實にもせよ、統計學的、生物學的、乃至、心理學的事實にもせよ——を分類彙集しなればならない。併し事實は飽くまでも赤裸々なる事實たるべく、決して激情と昂奮とであつてはならない、而して惜むらくはラッツェンホーフアーの遺著「社會學」は、社會的事實が著しく退讓するに反して、推理が全然主位を占むるといふ批難を免るゝことが出来ない、而して吾人が茲にラッツェンホーフアーに對して攻撃したことは、方法的にシベンダラーに對して二倍三倍に適用せられ得るのである。

(註一) D. Kcigen "Die Kultur der Demokratie" (1922) 一九八頁以下参照。

(註二) "Archiv für Geschichte der Philosophie" 一八九四年度第七卷六八頁所載 W. Dilthey "Die Autonomie des Denkens im 17. Jahrh."

(註三) Windelband "Geschichte der Philosophie" (Freiburg 1892) 三四一頁参照。

(註四) Rob. v. Mohl が既掲著書第一卷二二九頁に、グロートイウスの對して此名を與へて居る。

(註五) グロートイウスの著書 "Le jure belli ac pacis" 第一編第一章第十節を参照。

(註六) 前掲 Dilthey の著書七二頁、前掲グロートイウスの著書第二章五節

(註七) "Leviathan" 31, 46 以下

(註八) Flint Vico ("Philosophical Classics" の中) (一八八五年) K. Werner "Vico" (1877) 二六頁

(註九) Michelet, "Oeuvres choisies de Vico" (Paris 1895);

(註一〇) H. Höfding, "Rousseau" (1909); E. Haymann "Rousseaus Sozialphilosophie" (Leipzig 1898); M. Liepmann "Die Rechtsphilosophie Rousseaus" (Berlin 1898); G. Jellinek "Das Recht des modernen States" 第一卷一八八頁以下

(註一一) マンローの "Contrat social" IV, 2, 4; III, 3, 4.

(註一二) マンローが利己主義を以て、凡ての社交性の基礎とする、この如何に甚だしきかは Windelband が其 "Geschichte der Philosophie" 四一三頁に於いて、マンローの有名な「蜜蜂物語」——明かに、私的悪は公的利益なるを公式とする「利己的制度」の最も忌憚無き表現である——がマンローに於いて遺囑を止むると説いて、之を指摘して居る。

(註一三) 前掲 Fr. Jodi の著、第一卷二三五頁。

(註一四) ヒュームに對して「懷疑主義」の符牒を貼付けることを不當とすることは、決して吾人のみの説ではない、Th. Lipps H. Höfding, W. Windelband の諸家も、同様に「世俗が、ヒュームを「懷疑主義者」の中に編入することに對して抗議して居る。

(註一五) Mill, Auguste Comte and Positivism

(註一六) 前掲 Rob. Flint の著書第一卷二五九——二八三頁。

(註一七) 前掲 Ingram の著書一九九頁。

(註一八) Schiel の獨逸譯 "System der deduktiven und induktiven Logik" 第二版五三四頁。

(註一九) "Principles of Economics" 第一卷六一九頁以下。

(註二〇) "Cours de philosophie positive" 第六卷七四八頁。

(註二一) スペンサーは、其「社會學」第七節に於いて人間を、「一の社會的單位」と名づけて居る、この單位は、普通の有機組織

に缺くるところの意識を有する。亦、普通有機組織にあつては、部分は、單に全體の爲めに存在するに反し、社會に於いては全體は單に部分の爲めに存在する。

(註二二) 獨逸語版 スペンサーの社會學第二卷五四頁以下。

(註二三) 前掲 Rob. v. Mohl の著書第一卷七四頁。

(註二四) ハヤマン・コーヘンの言。ランマの "Geschichte des Materialismus" 第五版(一八九六年)序文六五頁に引用。

(註二五) 上掲ランマの著書六五頁に引きたるコーヘンの言

(註二六) ハーバート・スペンサーが、彼れの萬人の自由の要求に於いてヘーゲルと並に彼れの社會的正義の公式に於いて特にカントと合致する、とは頗る注目し得る。是れ「功利主義者」スペンサーを少なからず驚愕せしむることである。スペンサーの "Principle of ethics" 第四卷附録 A 参照。

(註二七) 前掲 Jodi の著書第二卷七三頁。

(註二八) Philosophie der Geschichte" 七四頁

(註二九) Franz v. Baaders "Die Soziätsphilosophie" (Tübingen 1901) 六〇頁

(註三〇) "Der Einzige und sein Eigentum" (1845)

(註三一) Tucker Staatssozialismus und Anarchismus" (1895).

(註三二) Mackay, Die Kulturgenilde aus dem Ende des 19. Jahrh." (1891) 普及版一八九四年。

(註三三) "Zarathustra" 第四篇及終篇

(註三四) 前掲 Stammler の著書二八頁。

(註三五) ランマの "Arbeiterfrage" 第五版一八九四年(三七八—三九二頁)(最近版柏林一九一〇年)

(註三六) Ed. v. Hartmann "Die Sozialen Kernfragen" (Leipzig 1894) 一頁

社會思想史終

人名索引

ア

アーカート Urquhart. 230
 アイスラー Rudolf Eisler 477
 アインシュタイン Einstein 233, 235, 319
 アウエル Ignaz Auer 341, 342
 アウグステイン Augustin 87-89 91, 98, 114, 453
 アウグスチヌス Augustinus 365
 アウレル Marc Aurel 56, 61
 アヴェロエス Averroes 95, 101
 アエキテイウス Aegidius von Rom 109, 113
 アドラー(ゲオルク) Georg Adler 336
 アドラー(ドクトル) Dr. Adler 342
 アドラー(フェリックス) Felix Adler 348
 アナキシメネス Anaximenes 416, 417
 アナキシマンデル Anaximander 416
 アプト Abbt 376
 アペラールド Peter Abaelard 94
 アヘリス Thomas Achelis 477
 アマビール Amabile 147
 アムブロシウス Ambrosius 80
 アムペール Ampère 336
 アリストファネス Aristophanes 19, 49, 368
 アリストテレス Aristoteles 6, 12, 14, 17 18, 37-49, 50-52 55, 56, 66, 96, 100-103 111, 124, 125, 150, 162, 289, 291, 324, 325, 340, 341, 368, 372, 406, 434, 433, 457, 458
 アリストイポス Aristippos 21, 145
 アルキメデス Alchimedus 199, 219, 457
 アルトゥーシウス Johannes Althusius 365, 366
 アルベルタイ Léon Baptiste Alberti 112,

117, 369

アルフォンス Alfons von Neapel 117
 アルキビアデス Alkibiades 9
 アルキダマス Alcidamas 16
 アルキン Alcuin 92
 アレクサンダー(大王) Alexander der Grosse 48, 50-53, 139, 199
 アレン Grant Allan 349
 アンティステネス Antisthenes 24, 26
 アンドロペトルス Petrus de Andlo 114
 アンゼール Anseele 344
 アンファンタン Barthélemy-Prosper Enfantin 198, 204, 206-208 241, 242

イ

イエーリಂಗ Ihering 64
 インノチエンツ三世 Innocenz III 100
 イブセン Ibsen 442
 イヨーブル Friedrich Jodl 349, 436
 イレネーウス Irennaeus 86
 イングラム Ingram 313, 401

ウ

ウールホルン Uhlhorn 80
 ウェーバー Weber ヴェーバーを見よ
 ウェブ夫妻 Webb 350
 ウォラストン Wallaston 388
 ウォレス Alfred Russel Wallace 348, 349
 ヴアラ Lorenzo Valla 111, 119, 121, 144
 ヴアロ Varro 60
 ヴァンデルヴェルテ Vandervelde 344
 ヴィーザー Wieser 338
 ヴィオレ ヴィオレット Violett
 ヴィクレフ Wiclef 118
 ヴィコー Giovanni Battista Vico 130, 384, 453, 455

ヴィルト Wirth 107, 332
 ヴィルガーデル Villegardelle 235
 ヴィルギル Virgil 2
 ヴィンクラー Benedikt Winkler 364
 ヴィンチ Lionardo da Vinci 117
 ヴィンデルバンド Windelband 381, 477
 ヴルフエン von Wulffen 314
 ヴェーバー J. J. Weber 477
 ヴェーバー(マックス) Max Weber 71
 ヴェーラツス Vairasse 119, 135, 151, 153
 ヴェガ Lope de Vega 2
 ヴェスプッチ Amerigo Vespucci 140
 ヴェンクシュテルン A. von Wenckstern 336
 ヴェンデル Wendel 134
 ヴォーバン Vauban 169
 ヴォルテア Voltaire 23, 166, 187, 411
 ヴォルダース Volders 344
 ヴォルフ(ユーリウス) Julius Wolf 291, 304, 339
 ヴォルフ(クリスティアン) Christian Wolff 376, 379, 380
 ヴォルムス René Worms 476
 ヴォルネー Volney 386
 ヴント Wilhelm Wundt 450 453-455, 458, 468, 474, 477

エ

エーバーハルト Eberhard 376
 エギタイ von Egidy 319
 エステ Este 117
 エピクテトス Epiktetos 56
 エピクロス Epikuros 53, 63-68 126, 145, 361-363, 368, 370
 エピファネス Epiphanes 81, 86
 エツフェルツ Effertz 341

エムペドクレス Empedokles 1, 417
 エラトステネス Eratosthenes 52
 エルム Adolf von Elm. 341
 エロイテロプロス Eleutheropulos 477
 エンゲルス Friederich Engels 198, 256, 261, 276, 282, 284, 286, 287, 334, 340
 エンゲル Engel 376
 エンゲエル Norman Angel 350

オ

オーヴィッド Ovid 2, 124
 オーウエン Robert Owen 198, 241, 242, 245, 256
 オーピタル Hopital 128
 オーグエー Houzeau 267
 オイリピデス Euripides 19, 363
 オイヘメルス Euhemerus 133
 オエツティンゲン von Oettingen 476
 オツカム Occam 113, 362
 オストワルト Ostwald 418, 466, 474
 オトマン Hotmann 128
 オツベンハイム H. B. Oppenheim 332
 ヨハネス、オルデンドルフ Johannes Oldendorp 364

カ

カルドゥン Ibn Khaldun 95, 96
 カーライル Thomas Carlyle 346, 347
 カール大帝 Karl der Grosse 91-92 98, 99
 カウツキー Karl Kautsky 290
 カザレ Cazalès 184
 カシエン Denys Cachin 313
 カツドウオース Ralph Cudworth 376
 カトー Kato 189
 カバニ Cabanis 386
 カベール Étienne Cabet 132, 135, 136, 154-

157, 198, 235, 237, 241, 242
 カムパネラ Thomas Campanella 110, 119,
 135, 146-150 153, 367
 カムバーランド Cumberland 376, 388
 カムプフマイヤー Paul Kampffmeyer 341
 カルヴイン John Calvin 118, 128
 カルヴェル Richard Calwer 341
 カルネアデス Karneades 368, 370
 カルポクラテス Carpocrates 81, 82
 カリグラ Caligula 188
 カリクレス Kallikles 16
 カグリオストロ Cagliostro 236
 カンチリオン Cantillon 169
 カント Immanuel Kant 237, 244, 271,
 232, 235, 287, 288, 357, 362, 380, 382,
 387, 390, 395, 426, 433, 434-436 440,
 441, 453, 463, 469, 473, 474
 ガウプ Otto Gaupp 426
 ガッサンデイ Gassendi 362
 ガル Ludwig Gall 251, 399
 ガルヴェ Garve 376
 ガリレイ Galileo Galilei 367

キ

キケロ Cicero 57, 60, 62, 124, 129, 369
 キッド Benjamin Kidd 349
 キモン Kimon 8
 キリスト Christus 73-85 327
 キングスレー Charles Kingsley 350
 キザツキ Georg Gizycki 311
 キチヤルディニ Guicciardini 110, 119, 122,
 123, 124

ク

クサーヌス Nikolaus Cusanus 114
 クセノフオン Xenophon 132, 137, 138

クナツプ Ludwig Knapp 64, 286
 クニース Karl Knies 313, 330
 クラーク Clark 388
 クラーテス Krates 24
 クラーフフンダー Craffunder 459
 クライン Hermann Klein 455
 クラインヅエヒター Friedlich Kleinwächter
 132
 クラウジウス Clausius 415
 クラツシン Krassin 230
 クリシツホス Chrysipp 55, 60, 61
 クリソストムス Chrysostomus 80
 クリテイアス Kritias 16
 クレアンテス Kleantes 58
 クレーメンス Klemens 79, 82
 クロブシュトツク Klopstock 2
 クローチエ Benedetti Croce 147
 クロエーンケ Kröncke 314
 クロポトキン Kropotkin 446, 447
 クロムウエリ Oliver Cromwell 163, 410
 グーテンベルク Gutenberg 244
 グールネー Gournay 169
 グムプロヴィツチ Ludwig Gumplowicz
 413, 463, 477
 グラースヴィンケル Graswinkel 367
 グラーフ Graf 343
 グラームツォーフ Otto Gramzow 463, 471
 グラクス兄弟 Gracchus 69, 72
 グリーン Green 349
 グリューンベルク Karl Grünberg 356
 グレゴール Gregor von Nyssa 80
 グレゴール第七世 Gregor VII 88
 グロート George Grote 3
 グロテウス Hugo Grotius 41, 55, 129,
 361, 366, 367, 368-370 372, 376, 378,
 380, 385

ケ

ケツテラー von Ketteler 329
 ケネー François Quesnay 168, 169-171
 ケトロー Quételet 476
 ケプラー Kepler 367
 ケリー Carey 331
 ゲースト Jules Guesde 342
 ゲーテ Johann Wolfgang Goethe 2, 282,
 461
 ゲール Gale 376
 ゲルラツハ Gerlach 325, 326

コ

コイゲン Koigen 357, 381
 コイト Salter u. Stanton Coit 348
 コーエン Hermann Cohen 434
 コーステル Koster 244
 コーネルネー Cornar 207
 コーネルリツグ Coleridge 415, 419
 コーン Gustav Cohn 333
 コツエーイー Cocceji 369
 コペルニクス Kopernikus 282 285
 コムト Auguste Comte 199, 201, 260, 293,
 320, 334, 353, 360, 395-407 450, 452,
 455, 460-463 470, 475
 コラヂヤニ Colajanni 343
 コルデー Charlotte Corday 188
 コルベール Colbert 154, 163-164
 コンシテラン Victor Considérant 218, 219
 コンドルセ de Condorcet 182, 455
 ゴッセン Gossen 348
 ゴッドウィン William Godwin 270, 291
 ゴビノー Dobineau 413
 ゴムペース Samuel Gompers 346
 ゴムベルツ Gomperz 412

ゴルトツハイト Rudolf Goldscheidt 477

サ

サイムス Symes 349
 サヴィニー von Savigny 320, 419, 429,
 476
 サヴォナローラ Girolamo Savonarola 110,
 118, 121, 244
 サトルニン Saturnin 81
 サルタテイ Coluccis Salutati 112, 121
 サルマツウス Salmasius 366
 サン、シモン Saint-Simon 199-208 211, 216,
 219-221 223, 229, 231, 232, 256, 297,
 304, 324, 400, 401, 411, 462
 サン、ゲュスト Saint-Just 184, 189, 245
 サン、ラムベール Saint-Lambert 386
 サムター Sumter 343
 サックス Sax 338
 サムバ Marcel Sembat 343
 サルター Salter 348

シ

シーザー Caesar 327
 シェーンベルク Gustav Schönberg 333
 シエース Sieyès 386
 シェクスピア(沙翁) Shakespeare 151
 シェツフル Albert Schäffle 333-337, 430
 シェリー Shelley 87
 シェリング Schelling 234, 415, 419, 433,
 439, 465, 466, 473, 474, 476
 シスモンディ Jean Charles Léonard Simon-
 de de Sismondi 224, 312-313 319
 シセロ Cicero キケロを見よ
 シトエベル Stoeipel 348
 シドニー Algernon Sidney 367
 シトロフスキー Schitolowsky 341

シツベル Max Schippel 341
 シラー Schiller 132, 453, 456
 シヤフツベリ Shaftesbury 361
 シヤフツベリ(小) 376
 シヤロン Charron 170
 シユヅアイガー Lazarus Schweiger 455
 シユタール Stahl 363
 シユタインタール Steinthal 450-460
 シユタイン(ローレンツ) Lorenz von Stein 327 334, 335
 シユタインメツツ Steinmetz 476
 シユタム Dr. Stamm 348
 シユタムラー Stammler 234, 235, 335
 シユチルナー Max Stirner 54, 442-444
 シユトエツカー Adolf Stöcker 329
 シユトラウス David Friedlich Strauss 440
 シユブレツハイム Spurzheim 399
 シユベンガラー Oswald Spengler 451, 453, 456, 458, 460, 466, 468, 469, 475, 479,
 シユミツト(カスパー) Kasper Schmidt 442
 シユミツト(コンラート) Konrad Schmidt 341
 シユモラー Schmoller 286, 333, 334,
 シユライエルマツヘル Schleiermacher 433, 437, 440
 シユライデン Schleiden 406
 シユルツエテリツチ Schulze-Delitzsch 223, 332
 シユレーゲル Friedlich Schlegel 419
 シユブルツ Berthold Schwarz 244
 シユヴン Schwann 406
 ショウ Bernard Shaw 351
 ショーペンハウエル Schopenhauer 432, 434, 468,
 シルレル Schiller シラーを見よ
 シグワルト Sigwart 147, 339

シムメル George Simmel 477
 シルヴェスター第一世 Silvester I 111
 ショーシ ショーシを見よ
 ショーレス Jean Léon Jaurès 343
 シンガー(ルドルフ) Rudolf Singer 329
 シンガー(j) J. Singer 336, 342

ス

スノーデン Snowden 350
 スピノーザ Baruch Spinoza 64, 256, 283, 331, 362, 373-375 416, 461, 465, 467, 472, 473, 475
 スフォルツァ Sforza 117
 スペンサー(トーマス) Thomas Spencer 347
 スペンサー(ハーバート) Herbert Spencer 37, 64, 201, 332, 334, 347, 404-433 456 462, 464, 467, 469, 470, 474, 475
 スミス(アダム) Adam Smith 41, 161, 162 173-176 177, 184, 195, 196, 233, 271, 310-312 316, 318, 322, 331, 377, 380, 382, 388, 390-391
 スミス(プリンス) プリンススミスを見よ
 スアールズ Franz Suarez 363, 365

セ

セー Jean Baptiste Say 310, 316, 331
 セネカ Seneca 2, 56, 60, 74, 369, 373
 セラ Serra 165
 セルヴァンテス Cervantes 2
 セーノ Zeno 50-53 59, 60, 61, 84, 136 139
 セーリガー J. Seliger 455

ソ

ソクラテス Sokrates 12, 20-21 59, 65, 145, 392, 393

ソフオクレス Sophokles 232
 ソロン Solon 11
 ソムバルト Wernert Sombar 336, 477

タ

タイラー Tylor 475
 タツツー Tasso 2
 ターヴィット Eduard David 341
 ターヴィン Charles Robert Darwin 159, 283, 285, 406, 407, 413, 413, 414, 415, 421, 474
 タマシユケ Adolf Damaschke 348
 タルター Darthé 190
 タンテ Dante Alighieri 2 107 110-113
 タントン Danton 181, 186, 187 189

チ

チェンバレン H. St. Chamberlain 413
 チチエロ Cicero キケロを見よ
 チェリニ Benvenuto Cellini 117
 チヤイルド Sir Josiah Child 165
 チュルゴー Turgot 169, 171, 463
 チェヴォンズ Stanley Jevons 403
 チェルソン Joh. Gersons 114
 チェンテイリス Albericus Gentilis 369
 チョーゲ(ヘンリー) Henry George 311, 345-347 348
 チョーゲ(ロイド) Lloyd George 348
 チレス、テ、ローム Giles de Rome 109

ツ

ツヴィンゲリ Zwingli 118, 244
 ツェラー Zeller 71
 ツキテイデス Thukydides 64, 124, 125, 368, 371
 ツッカー Tucker 442

テ

テイエリ Augustin Thierry 199
 テイエール Thiers 331
 テイブル Tibull 2
 テーテンス Tetens 376
 テーヌ Taine 74, 125, 256, 260, 461
 テオポムボス Theopomp 1, 138
 テミストクレス Themistokles 8
 テューネン(フォン) Joh. Heinr. von Thünen 313-315 320
 テルトウリアヌス Tertullian 81, 86
 テレシオ Bernardino Telesio 371
 テイーツェル H. Dietz 320, 324, 333
 テイオゲネス Diogenes 24, 416
 テイオドロース Diodor 4
 テイクーアルク Dikaearch 22
 テイスレリ D'Israeli 347
 テーネ Dähne 71
 テカルト René Descartes 373, 396
 テツアミー Dézamy 251
 テモクリトス Demokrit 14-17 21
 テューリッゲ Eugen Dühring 437, 447-449
 テュルケーム Emile Durkheim 477

ト

トエニース Ferdinand Tönnies 236, 349
 トウー de Thou 123
 トーマス Thomas 350
 トーマス(フォン アクキノ) Thomas von Aquin 93, 101-105 109
 トニツセン J. J. Thonissen 5
 トフアイル Abu Bekr Ibn Tofeil 95, 139
 トマシウス Thomasius 376, 379
 トムスン William Thompson 270, 271,

291
 トラシー Destutt de Tracy 386
 トリオント、ダンコナ Trionto d'Ancona
 109
 トルストイ Leo Nikolaievitch Tolstoi 22,
 23, 71, 311, 444, 268
 トレオールチ Troeltsch 477
 トレンデンブルク Trendelenburg 231
 ドーニ Doni 146
 ドウロ Droz 336
 ドエリッガー Döllinger 91
 ドラゴン Drakon 11
 ドリース Driesch 476

ナ

ナウマン Friedlich Nauman 329
 ナツセ Erwin Nasse 333

ニ

ニーチェ Friedlich Nietzsche 58, 59, 100,
 372, 419 442-445 448, 463
 ニコライ Nicolai 376
 ニコリ Nicolò Niccoli 112, 121
 ニツチ Karl Wilhelm Nitzsch 285
 ニューウエンハイヌ Domela Nieuwenhuys
 342
 ニュートン Newton 173, 367
 ニューマン Newman 349

ネ

ネロ Nero 188

ノアイユ Vicomte de Noailles 117, 223,
 ノース North 167

ハ

ハースバツハ W. Hasbach 333
 ハイスロデーアス Rafael Hythlodeus 140
 ハイネ Wolfgang Heine 87, 341
 ハインドマン Hyndman 349, 350
 ハクスレー Huxley 311, 349
 ハッチェスン Francis Hutcheson 361, 376,
 388
 ハラー(アルブレヒト、フォン) Albrecht von
 Haller 133
 ハラー(ルートヴィッヒ、フォン) Ludwig von
 Haller 328
 ハリントン Harrington 119, 135, 152
 ハルトマン Karl Robert Eduard von Hart-
 mann 281, 447, 449 468
 ハンセン Hanssen 286
 ハークレー John Berkley 151
 ハーダー Franz von Baader 439
 ハーネス H. B. Barnes 346
 ハール H. Bahr 337
 ハーンズ Burns 349
 バイウオーター Bywater 412
 バイロン Lord Byron 87
 バウエル(シュテファン) Stefan Bauer 168
 バウエル(ブロー) Bruno Bauer 440
 バクーニン Bakunin 307 444-446
 バクス Belfort Bax 349, 350
 バツケル Buckle 122, 130, 260
 バザール Saint-Amand Bazard 198, 204,
 206
 バジリウス Basilius 80
 バジリデス Basilides 81
 バステイア Bastiat 331
 バステイアン Bastian 475
 バトラー Butler 376

バブーフ François Émile Babeuf 184,
 190-191 192
 バーカー Samuel Paker 376
 バウル二世 Paul II 116
 バウル Paul 77
 バスキエ Pasqual 128
 バトリタイコ Francesco Patritico 146
 バネータイウス Panätius 57, 62, 369
 パノルミタ Panormita 121
 パラケルズス Paracelsus 366

ヒ

ヒエロニマス Hieronymus 79
 ヒメルキア Hipparchia 24
 ヒピアス Hippias 16
 ヒピラー Hipler 134
 ヒポダモス Hippodamus von Milet 12-14
 ヒッポリトス Hippolytos 412
 ヒューズ Tom Hughes 350
 ヒューム David Hume 41, 64, 271, 350,
 387-392 399
 ヒルゲンフルト Hilgenfeld 71
 ヒルデアブランド Richard Hildebrand 313
 ヒルファアアインゲ Hilferding 244, 337,
 340
 ビーヒ Alfred Biese 431
 ビスマルク Bismarck 223
 ビュツクオア伯 Graf Buquoy 314
 ビューキヤナン Buchanan 123
 ビラン Maine de Biran 386
 ビタゴラス Pythagoras 11-12 13, 40, 59,
 417
 ビュラーデス Pylades 282

フ

フーバー John Huber 325, 327

フーリエー Charles Fourier 198 209-220
 221, 223, 231, 237, 238, 241, 245, 251,
 252, 256, 411
 ファーガスン Ferguson 376, 383
 ファレアス Phaleas von Chalcedon 12-14
 16
 ファアカント Vierkandt 476
 ファイヒテ Fichte 31, 124, 232, 233, 244-
 249 250, 362, 366, 397, 433-438 440-
 442, 448, 453, 465, 466, 472-474
 ファイランゲエリ Filangeri 333
 ファイリツプ(美王) Philip der Schöne 113
 ファイリツプエガリテ Philippe Egalité 184
 ファイリツプホヴィツチ(フォン) von Philippo-
 vich 333
 フィロ Philo 57, 60, 66, 74
 フィロラオス Philolaos 417
 フェデリゴ Federigo von Urbino 117
 フェネロン Fénelon 138
 フェリ Enrico Ferri 311, 343
 フェレクラテス Pherekrates 1
 フォイエルバツハ Ludwig Feuerbach 236
 281, 440
 フォルカースドルフ Engelbert von Vol-
 kersdorf 113
 フォルマー(フォン) J. von Vollmar
 225, 329, 342
 フッテン Hutten 446, 447
 フス Huss 118
 フランツィスクス Franziskus von Assisi
 94
 フリードリッヒ第一世 Friedrich I 99
 フリードリッヒ第二世(大王) Friedrich II
 98, 99-101 110, 124, 326
 フリュールシャイム Flürscheim 348
 フリント Robert Flint 89, 384, 397, 453

フロシヤマー Frohschammer 469
 フロリス Joachim von Floris 94
 ブーヘル Bucher 223
 ブーヒエル Carl Büchar 325
 ブライス Bryce 88
 ブライツツヒ Kurt Breysig 475
 ブラックスストーン Blackstone 383
 ブラッドラツフ Bradlaugh 349
 ブラン Louis Blanc 47, 198 **221-230** 231,
 235, 237, 241, 245, 297, 304, 305
 ブリアン Briand 343
 ブリッソー Brissot 183
 ブリュンチエール Brunetière 357
 ブルクハルト Jakob Burckhardt 107
 ブルニ Leonard Bruni 112, 121
 ブルンチリ Bluntschli 419 476
 ブレシヤ Arnold von Brescia 94, 109
 ブレピコス Blepyrus 19
 ブレントナー Lujó Brentano **333-334**
 ブツテウス Buddeus 369
 ブハナン Buchanan 365
 ブンゲ Bunge 418, 476
 プラトン Platon 13, 18, 23, **26-36** 37, 41,
 43, 45-47 56, 65, 66, 69, 129, 130, 132,
 136, 137, 145, 147, 148, 151, 174, 234,
 406, 458, 459
 プーフエンドルフ Samuel von Pufendorf
 370
 プラクサゴラ Praxagora 19
 プリーストリー Joseph Priestley 392
 プリンス、スミス J. Prince-Smith 332
 プルドン Proudhon 183, 198, **231-243**
 324, 437, **441-442**
 プルターク Plutarch 53, 66
 プルツツ Prutz 1 57
 プレンゲ Plenge 284

プレトン Gemistos Plethom **119-121**
 プロタゴラス Protagoras 18
 プロティン Plotin 66, 89, 136
 プロチダ Johann von Procida 109
 へ
 ヘーウツフ Heywood 151
 ヘーゲル Georg Wilhelm Friedrich Hegel
 66, 249 **255-260** 268, 277, 281, 284,
 288, 306, 421, 423, **437-439**
 ヘカテウス Hekataüs von Abdera 1, 133
 ヘツケル Ernst Haeckel 406
 ヘシオット Hesiod 1
 ヘツドラマ Headlam 349
 ヘフディング Höfding 349
 ヘミンク Nikolaus Hemming 364
 ヘラクリトス (Heraklit, Heraclitus) **14-**
 17 40, 412, 413, 417, 420, 421, 460, 464
 ヘルツカ Hertzka 136, 311, 348
 ヘルクナー Herkner 336
 ヘルダー Herder 130, 244, 260, 387, 396,
 414, 435, 440, 453, 461
 ヘルトヴィツヒ Hertwig 418
 ヘルバルト Herbart 433, 434
 ヘンダーソン Arthur Hernderson 350
 ベイン Bain 402
 ベーコン(ローグヤー) Roger Bacon 94
 ベーコン(フランシス) Francis Bacon 119,
 135, **150-155** 163, 244, 371 420
 ベートマン von Bethmann 45
 ベーベル Ferdinand August Bebel **329,**
341-342
 ベーベンブルク Leopold von Bebenburg
 113
 ベール Karl Ernst von Baer 415, 419,
 471

ベツカリヤ Beccaria 383, 391
 ペトラルカ Petrarca 87, 110, 117, 121
 ベラールミン Bellarmin 363
 ベラミー Bellamy 133, 136, 141, 155, 156,
 158
 ペリクレス Perikles 8, 147
 ベルンシュタイン Eduard Bernstein 290
 339, **341**
 ベンタム Jeremy Bentham **391-394** 403
 ペティー William Petty 167, 271, 382

水

ホーマー Homer 4
 ホール Hall 270, 291
 ホッブス Thomas Hobbes 64, 99, 129;
 236, 321, 362, 867, 363, **370-373** 376,
 380, 382, 413, 462
 ホアギユベール Boisguillebert 169
 ホイル Boyle 367
 ホエーム、バエルク Böhm-Bawerk 338
 ホエタイー de la Boetie 128
 ボーデン Jean Bodin 96, 119, **128-131**
 361, 383
 ボートリヤール Henri Baudrillart 128
 ボテロ Giovanni Botero 161, 367
 ボナロチ Buonarrotti 190
 ボルゲヤ Cesare Borgia 100, 127
 ボエールマン Poehlmann 11, 53, 138
 ボジドニウス Posidonius 62
 ポリビウス Polybius 124

マ

マーシャル Marshall 403
 マーロー Marlo 245, **249-252**
 マイツエン Meitzen 286

マイヤー(リヒアールト、エム) Richard M.
 Meyer 453
 マイヤー、ルドルフ Rudolf Meyer 300,
 325, 328
 マキアヴェリ Niccolo di Bernardo Machia-
 velli 110, 119 **122-127** 128-130 331,
 361, 370, 372, 460
 マツクカロツク McCulloch 331
 マクドナルド Ramsay MacDonald 350
 マツクレナン McLennan 475
 マツケー Mackay 442
 マニング Manning 329
 マツハ Ernst Mach 419
 マブリ Mably 182, 245
 マホメット Mahomed 327
 マラー Marat 181, 196, **188** 189
 マラテスタ Malatesta 117
 マリアナ Juan Mariana 363
 マルシリウス・フォン・パドヴァ Marsilius
 von Padua 110, 113, 362, 367
 マルクス Karl Marx 9, 37, 74, 166, 198,
 236, 249, **255-256** 297, 299, **300-303** 306,
 307, 309, 320-323 337, 339-341 346, 378,
 382, 410, **411-413** 427-429 440
 マルサス Thomas Robert Malthus 210
310-313 316, 368, 413
 マルブランシュ Malebranche 168
 マレシャル Silvain Maréchal 386
 マロン Benoit Malon 342
 マン(トーマス) Thomas Mun 165
 マン de Mun 326
 マンデヴィル Mandeville 23
 ミシュレー J. Michelet 107, 384

ミヒアエリス Michaelis 332
 ミュラー Adam Müller 328
 ミュルベルガー Mülberger 336
 ミュンツェル Thomas Münzer 90, 119,
 134
 ミラボー Mirabeau 169, 184, 201
 ミル(ジェームス) James Mill 347
 ミル(ジョン、スチュアート) John Stuart
 Mill 64, 347, 349, 396, 401-404
 ミルトン John Milton 2, 366, 410
 ミルラン Millerand 343

メ

メーゲンベルク Konrad von Megenberg
 113
 メーリング Mehring 290
 メダイチ Johann von Medici 117
 メランヒトン Melanchthon 363
 メンガー Karl Menger 337-338
 メンデルスゾーン Mendelssohn 376
 メンハカ Ferdinand Vasquez Menchaca 364

モ

モア(トーマス) Thomas More, Thomas
 Morus 119, 124, 123, 134, 135, 139,
 140-146 149, 150, 163
 モア(ヘンリ) Henry More 376
 モーリス Maurice 350
 モーレル Robert von Mohl 132
 モーレル Morel 350
 モリーナ Ludovicus Molina 363
 モリス William Morris 349
 モルガン Morgan 475
 モレシヨット Moleschott 419
 モレリ Morelly 135, 153, 182, 245
 モンテーニュ Montaigne 128

モンテスキュー Montesquieu 129, 173,
 324, 331, 380, 382-385

ヤ

ヤーコプ、フォン、ヴィテルボ Jakob von
 Viterbo 109
 ヤツ(耶蘇) キリストを見よ
 ヤムブルス Jambulus 138

ユ

ユークリッド Euklid 393

ヨ

ヨセフス Josephus 70
 ヨーハン Johann 127
 ヨハネス・フォン・メリス Johannes von
 Paris 113

ラ

ラーテナウ Rathenau 107
 ライデン Johann von Leyden 90, 119, 134
 ライヒト Alfred Leicht 454
 ライブニッツ Leibniz 271, 298, 332, 373,
 375-384 396, 405, 473
 ライヘル Hans Reichel 439
 ライマールス Reimarus 376
 ラインケ Reincke 471, 475, 476
 ラヴィゲリエー Lavigerie 329
 ラヴレー Emile Laveleye 4, 311
 ラエトウス Pomponius Laetus 116
 ラサール Ferdinand Lassalle 14, 47, 193,
 202, 223, 225, 246, 249, 267, 297-308
 314, 320, 322, 340
 ラスキン John Ruskin 349
 ラツァルス Lazarus 450-460
 ラツツェル Fr. Ratzel 130

ラツツェンホーファー Gustav Ratzenhofer
 451-453, 460-481

ラファウリー Lafaurie 320
 ラファエル Raffael 141, 145
 ラファルグ Lafargue 342
 ラフォンテーヌ Lafontaine 344
 ラブリオーラ Antonio Labriola 343
 ラブレール Rabelais 146, 148, 149
 ラボック Lubbock 475
 ラボポルト Charles Rappoport 341
 ラマルク Lamarck 260, 497
 ラマルティエール Lamartine 188, 227
 ラムプレヒト Karl Lamprecht 235, 475
 ラ、メットリール de la Mettrie 316
 ランケ Ranke 285
 ランゲ Friedrich Albert Lange 284, 447
 ランゲール Humbert Languet 123, 365

リ

リカルド Ricardo 267, 271, 289, 303
 310-316 331, 332
 リツケルト Rickert 477
 リスト Friedrich List 315-320
 リヒター Richter 410
 リボット Ribot 474
 リュクルガス Lykurgs 5, 7, 53
 リュコフロン Lykophron 16
 リュルイ Rayomundus Lullus 96
 リリエンフェルト Lilienfeld 430, 476

ル

ルイ、フィリップ Louis Philipp 232
 ルードヴィヒ(ルイ)第十四世 Ludwig
 (Louis) XIV 99, 373
 ルーゲ Ruge 440
 ルードロー Ludlow 350

ルクセムブルグ Rosa Luxemburg 244, 340
 ルクレシウス(ルクレツ) Lucretius(Lucrez)
 65, 368
 ルソー Jean Jacques Rousseau 2, 22, 23,
 130, 135, 170, 171, 183, 185, 189, 236,
 245, 246, 362, 367, 382, 385-388 448
 ルター Luther 118, 123, 134, 203, 446
 ルナン Renan 78
 ルルー Pierre Leroux 207
 ルロア・ボーリユール Leroy-Beaulieu 37

レ

レーニン Lenin 48
 レオバルディ Leopardi 87
 レクリュー Reclus 311, 414, 446
 レツシング Lessing 95, 96, 130, 377, 433
 レティフ、ドゥ、ラ、ブレトンヌ Rétif de la
 Brétonne 154

ロ

ロー John Law 166
 ローデ Erwin Rohde 132
 ロートベルツ Rodbertus 198, 202, 225,
 302, 320-325
 ロック John Locke 129, 167, 173, 322,
 367, 380-383, 385
 ロッシャー Wilhelm Roscher 316
 ロドリゲス Olinda Rodrigues 199, 203,
 207
 ロベスピエール Robespierre 181, 185, 186,
 188, 189 367
 ロホル Rocholl 453
 ロムプロゾー Cesare Lombroso 343
 ロヨラ Loyola 126, 236

ワ

ワード Lester F. Ward 463 477

ワグナー ワグナーを見よ

ワットヴィル Montchrétien de Watteville
165

ヴァイトリンガ Weitling 245 251-254

ワグナー Wagener 325, 327

ワグナー Adolf Wagner 333, 335 336

ヴァイツェッカー Weizsäcker 78

索引 終

昭和二年九月二十三日
昭和二年九月二十五日
昭和七年六月十五日
印刷
發行
訂正五版
定價金二圓五十錢

東京市芝區芝公園六號地
財團法人協調會內

編輯者 山 上 弁 藏
印刷者 東京市麴町區紀尾井町三番地
濱 野 英 太 郎

發行所

東京市芝區
芝公園六號地
協

調
會

電話芝一三一三
掛號東京五三七〇四番

(所張出町麴社會式株刷印京東)

573
104

協調會刊行好評書

最近の社會運動	退職手當制度の現状
送料 金拾貳圓 五十七錢	送料 金四十錢
各國勞働組合運動史	最近の農民運動
送料 金二十一錢	送料 金五十錢
獨逸勞働組合運動史	吾國過小農問題と共同經營
送料 金二十三圓	送料 金四十錢
各國の社會政策	產業組合及農會の教育的活動
送料 金二十一錢	送料 金二十錢
產業合理化と社會政策	各國勞働爭議統計
送料 金五十錢	送料 金五十錢
英國產業の合理化問題	各國勞働賃銀統計
送料 金八十錢	送料 金二十一錢
英國の失業及其對策	昭和七年全國工場鑛山名簿
送料 金五十錢	送料 金二十一錢
勞資協調の諸方法	昭和七年海外勞働年鑑
送料 金四十錢	送料 金十四錢

